

教室の中のアート
Art en cours

東京日仏学院・編

集英社インターナショナル
Shueisha international

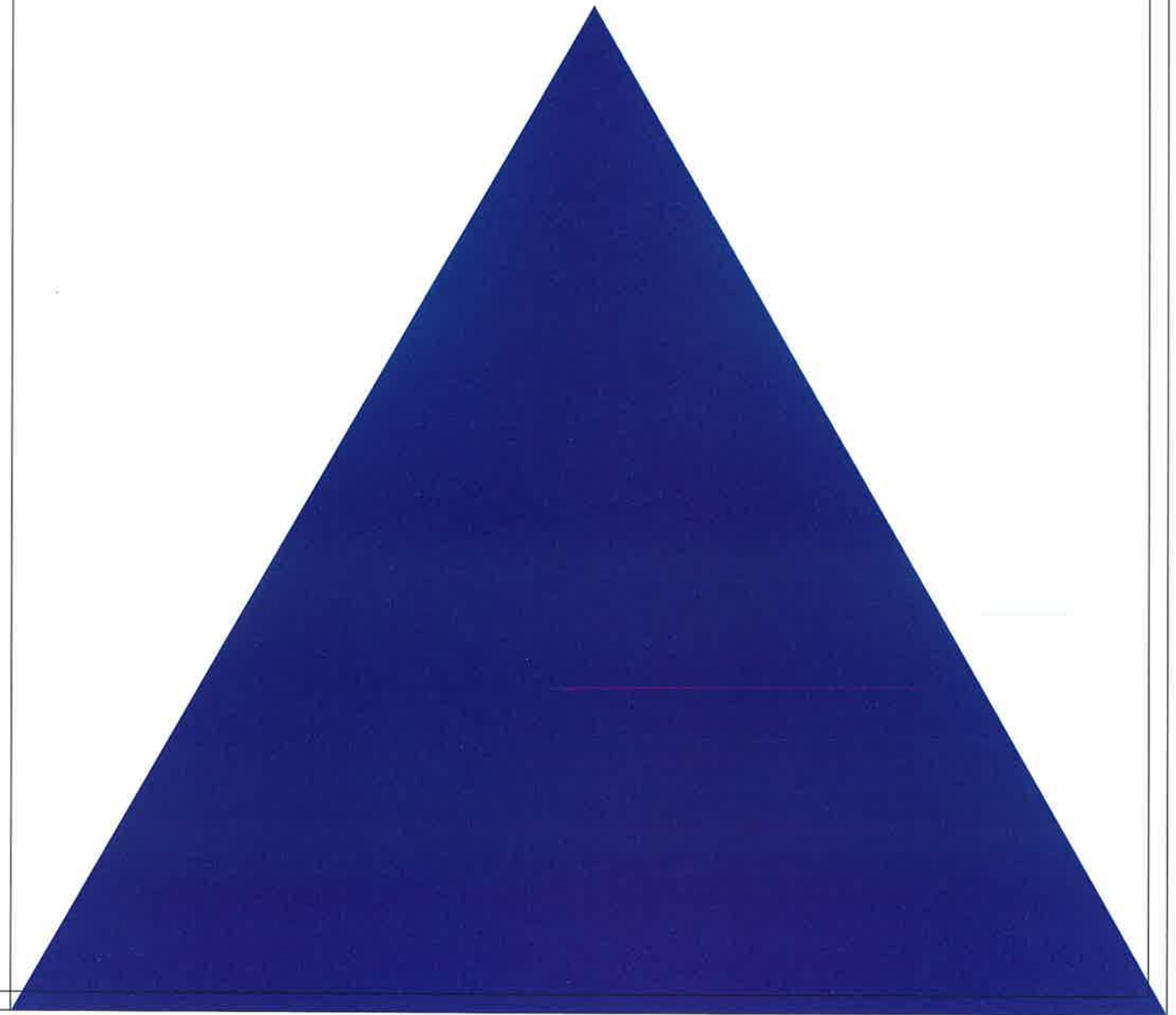
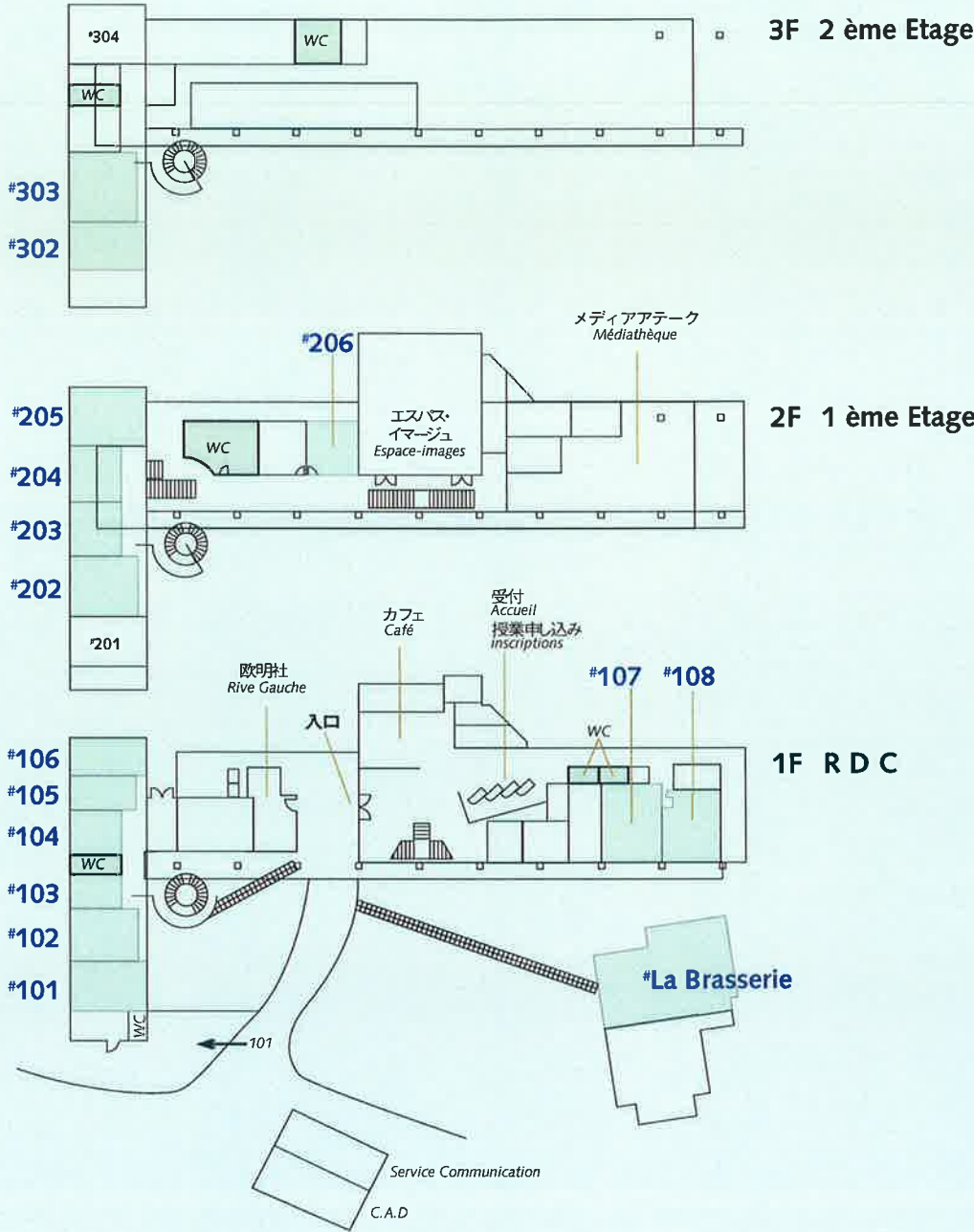


Table des matières

目次

		「教室の中のアート」に寄せて ロベール・ラコン、ブエリーズ・メリジョ、サンソン・シルヴァン	154
		東京の真ん中で、 フランス現代アートの世界に浸る 北川フラム	154
#101	Lucie Albon	リュシー・アルボン	154
#102	Jean Michel Alberola	ジャン＝ミシェル・アルベローラ	154
#103	Isabelle Boinot	イザベル・ボワノ	154
#104	fafi	ファフィ	154
#105	Agathe de Baillencourt	アガト・ド・バイヤンクール	154
#106	Aicha Hamu	アイシャ・アミュ	154
#107	Psyckoze	プシコーズ	154
#108	Vincent Lefrançois	ヴァンサン・ルフランソフ	154
#202	Jean-Luc Vilmouth	ジャン＝リュック・ヴィルムート	154
#203	guacolda	リュシーアルボン	154
#204	RCF1	RCF1	154
#205	Jacques floret	ジャック・フロレ	154
#206	Pierre la Police	ピエール・ラ・ポリス	154
#302	Marie Drouet	マリー・ドゥルエ	154
#303	Romain Erkiletlian	ロマン・エルキレティアン	154
#La Brasserie	ThomaVuille	トマ・ヴュイユ、 あるいはムッシュー・シャ	154
		東京日仏学院の建物とその歴史	154
		私たちは、東京の中の小さなパリ 「東京日仏学院」で学んでいます。	154
		フランスの食文化を紹介する 「ラ・プラスリー」	154



「教室の中のアート」に寄せて

2012年、東京日仏学院は創立60周年を迎え、これまでも増して新鮮に生まれ変わります。記念すべきこの60周年を祝うため、私達は現代アートに大きく門戸を開きました。そして今日、ほぼすべての教室にこっそりと、しかし確実に現代アートが忍び込んでいます。さまざまな傾向、流派、信条を持った16人のフランス人アーティストたちが、勉学のための部屋に生命と色彩を与え、教室の壁は予期せぬ色と形に彩られることになりました。

想像と夢の世界に向かって開く窓となったこれらの作品は、フランス現代アートの驚くべき多様性を示しています。フィギュラシオンリーブル(自由具象芸術)やグラフィティ、バンド・デシネにヘナを使った絵画まで、主観的な偏りがあるにせよ、多様な作風のアーティストが選ばれ、独創的で奇妙、さらには非礼ともとれるような作品が、個性のない教室の勤勉な雰囲気の中に不法侵入のように入り込んだのです。

アーティストたちの選択にあたっては、「選考委員会」のようなものがあったわけではなく、ただ喜びをもって、作風の多様性や、アーティストの質を基準に選びました。

そして様々な出会いや、時には偶然によって、世界で類のない現代アートの壁画コレクションが出来上がったのです。これらの作品は私達のフランス語の授業の勤勉な生活リズムの中に存在する一方、私達を旅、瞑想、ユーモア、考察へと誘います。この壁画コレクションに対する反応は、満場一致の評価からはほど遠く(これほど多様なスタイルを前にしては不可能なことです)、さまざまな作品は、時に学生と教師に議論をもたらし、彼らから異議を受けたこともあります。これは素晴らしいことではないでしょうか。

このコレクションは、私たちが21世紀の東京日仏学院に望むイメージはもちろん、芸術のあり方に対するある一つの考え方も活き活きと反映しています。美術館でもギャラリーでもない生活の場所に、芸術作品が内在的に日常の一部となる。脱神聖化され、身近で、直接的で、具体的な芸術作品が、計り知れない神秘的側面を保ちながらも、生活のひだに入り入りこむ……すでに名声を得ているアーティストにも、これから活躍するアーティストにも、この発案の独創性に魅了され、われわれの提案に情熱をもって応えてくださった彼ら全員に感謝します。

中庭にあるラ・プラスリーの外壁に描かれた、ムッシュー・シャのパリの的で遊びに満ちた作品によって補完されるこのコレクションで紹介されている作品やアーティストは、フランスの芸術文化の現代性を優先して選択され、それは時に日本でイメージされているような型にはまった伝統的なフランスのイメージとはかけ離れていることでしょう。新しいものに敏感で非常に前衛的な日本という国において、私たちがあまりに懐古趣味的な自国文化のイメージに閉じこもるべきではありません。フランスの文化遺産は誇るべきものですが、明日の遺産となる現代の芸術作品も積極的に紹介するべきでしょう。

「教室の中のアート」は、東京日仏学院で催される他のプロジェクトと同様、私たちのプロジェクトに関心を寄せ、しばしば学院の枠を超えてプロジェクトに命を吹き込んでくれた日本の美術館、ギャラリー、劇場、映画館、コンサートホール、メディア、そして出版社の方々の支援がなければ成り立ちえませんでした。ここで厚く御礼申し上げます。

最後に、60年にわたり、これほど異なり、しかしこれほど近い日本とフランス、両国民の対話を実現させてきたすべての人々の並外れたエネルギーに敬意を表します。2012年、両国の強い関係をそのままに保ちながら、われわれの歴史の新たなページをめくることができるよう願いましょう。

皆様のお越しをお待ちしております！

ロベール・ラコンブ
東京日仏学院 院長(2008年9月～2012年1月)

エリーズ・メリジョ
東京日仏学院 文化コーディネーター(2009年3月～2010年12月)

サンソン・シルヴァン
東京日仏学院 文化コーディネーター(2011年1月～)

東京の真ん中で、
フランス現代アートの世界に浸る
北川フラムFram Kitagawa

他国での都市の中にある文化交流施設にある教室(とりわけその壁)というのが個々の作家に与えられた場所だ。

そこで考え、描き、作られるヒントになったもの。
言葉
日常
時間
学習・教科書・ノート
交流
いたずら
旅行
身体・体を動かす
異文化(漫画・アニメ・浮世 絵・水墨画)

そして作品は当然のことなが ら、壁へのイラストが多く、かつうるさくなく、楽しい気持ちになるように考案されている。いわば「2000年代東京のグラフィティ」と言った趣で、街中で展開されているけど違和感がない。教室に入ってみれば、爽やかで、違う教室を巡ってみればますます多様で、その楽しさが伝わってくる。音楽的だ。

私たちは明治の開国以来、特に美術に於いてはフランスの動向に影響を受けてきた。グローバル化した現代にあっても事情は以前とそう変わらない。またフランスは他国出身のアーティストにアトリエ、発表の場を寛容に提供するので、今だにピカソはフランス出身のアーティストだと思っている人が多いほど、フランスはアートの泉だと一般には思われている。

そしてまた生活の全体が文化だとする立場から言うと、現代哲学でフランスが発信源になっている場合も多く、フランスの現代美術は勢いがよい。それらを背景としてこのプロジェクトが成立している。当然のこととしてエスプリが効いているのだ。

交流文化施設でのアートプロジェクトが世界的に拡がっている。しかし額縁に入って持ち込まれてくる作品とは違って、お国自慢を表にかざさないこのプロジェクトは鮮やかで、好感を持てる。さすがなのだ。

Une balade dans l'art contemporain
français, en plein cœur de Tokyo

Fram Kitagawa

Un lieu dédié aux échanges culturels, en plein cœur de la ville, qui offre les murs de ses salles de classe à différents artistes.

Voici les mots-clés me paraissant avoir inspiré les œuvres qui y ont été créées :

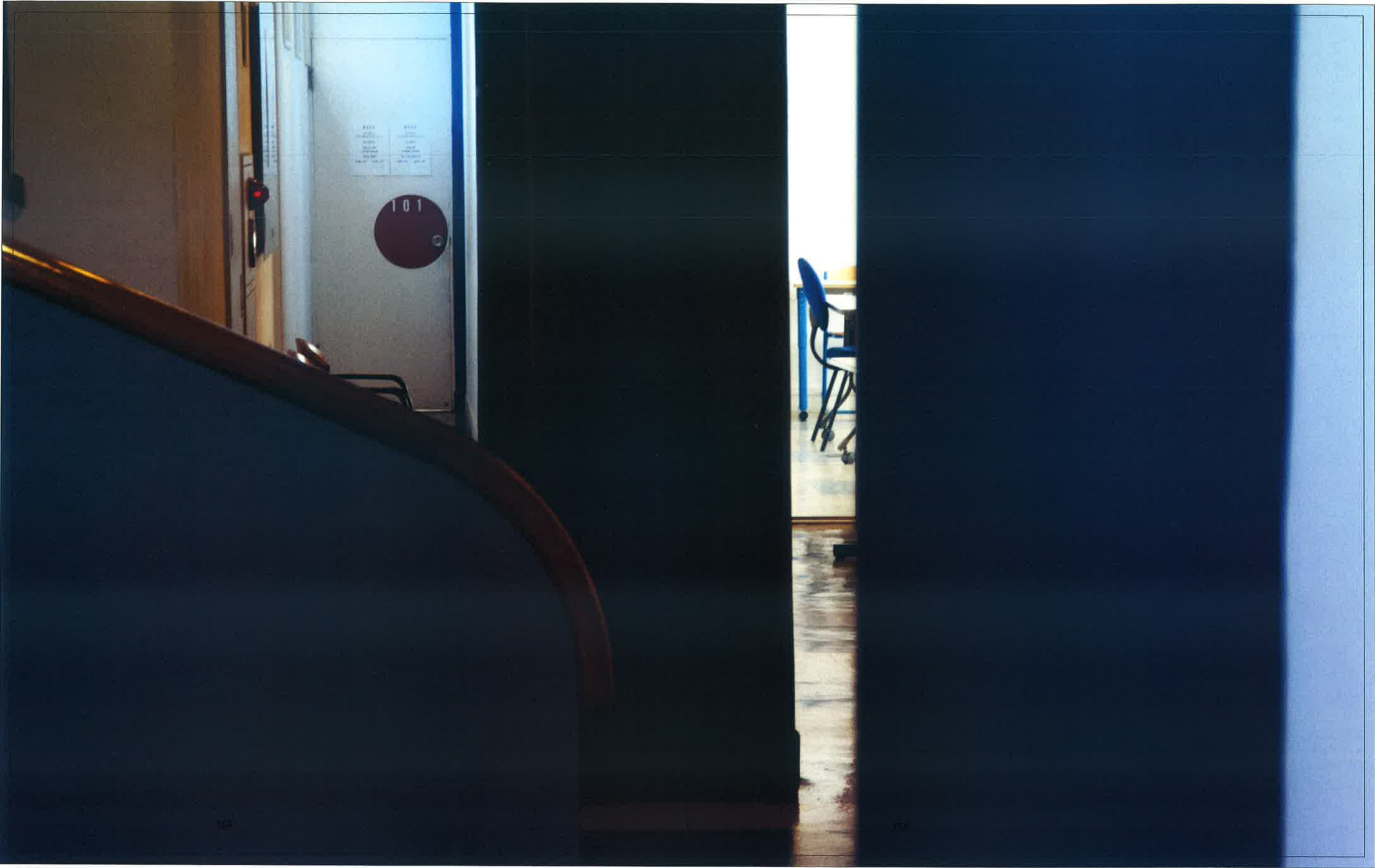
Paroles
Quotidien
Temps
Etudes, manuels, cahiers
Echanges
Malice
Voyage
Corps, mouvement
Autres cultures (mangas, animés, estampes, dessins à l'encre de Chine)

Ces œuvres murales ont été conçues pour ravir le visiteur sans l'envahir. On pourrait très bien les imaginer couvrant les murs de la ville, dans le goût des « graphitis des années 2000 à Tokyo ». Lorsqu'on pénètre dans une salle, on est pris d'un sentiment de nouveauté et l'on passe de l'une à l'autre tout en appréciant la diversité des œuvres. Comme dans une suite musicale.

Depuis son ouverture à l'époque Meiji, le Japon a été influencé par la France, particulièrement dans le domaine des arts. Aujourd'hui encore, et malgré la globalisation, les choses n'ont pas beaucoup changé. La France, généralement considérée comme pays des arts, met à la disposition des artistes étrangers ateliers et lieux d'expression – au point que nombreux encore sont ceux qui pensent qu'un artiste comme Picasso est français. De même, pour moi qui estime que la vie dans son ensemble est affaire de culture, la France me paraît une référence dans les domaines de la philosophie et de l'art contemporains, qui connaissent d'ailleurs un dynamisme remarquable. C'est aussi dans ce contexte qu'est né ce projet. On y reconnaît bien là l'esprit français.

Les projets artistiques organisés dans des établissements culturels se sont multipliés dans le monde ces dernières années. Or, loin d'exposer des œuvres déjà existantes, sous cadre, ou de passer pour une vitrine prétentieuse de la France, ce projet nous laisse une formidable impression de vitalité. Chapeau !





Lucie Albon
リュースーアルボン

#001

Le trait plutôt que les masses

全体よりも線を練ること



1

01教室のドアの右側に立つ小粋な若い女性に誘われて、私たちはリ
シー・アルボンの魔法の世界に足を踏み入れる。

目を閉じ、快い逃避の夢に耽って、彼女は旅の装いに身を包んで
いる。彼女の前に置かれたスーツケース＝ワニが口を大きく開けているのは、発見への渴望
があまりに大きいからだ！

教室に入ると、入口左手の壁に同じ少女が肘掛椅子で深い眠りに陥っている。少女
の夢に登場するのは、想像上の人物やひょうきんな動物たち。入口近くの、彼女からそれ
ほど遠くないところに、翼の生えた精がいて、待ち伏せしているかのように、正面(入口の右側)
の壁のほうに顔を向けている。その視線を追うと、この同じ少女がうさぎの耳を持った不思
議な人物に秘密を打ち明けているのが見える。その思いは詩的に花びらの形となって舞
い上がり、消火栓扉の上に留まった一匹のネズミが両手を組み、嘲笑しながら、その場面
を見ている……。

が、リシーの魔法の世界はそこで終わらない。新たな驚きが右手のトイレに通じるドアを
開けよとした好奇心の強い訪問者を待ち受けている。そこでは、薄暗い小部屋に両性
具有の人物が現れる。この人物は巨大な魚をつかまえていて、その魚の尾ひれには旅人
のカップルを乗せたゴンドラがつながれている。人間たちはこの魚を飛行船だと思っている
のだろうか？ 両性具有者は、笑い半分、驚き半分、この魚から重荷を取り除いてやろうと
している。

001教室の作品は想像力を解き放ち、登場人物たちの物語を解説したいという欲求を
かき立てる。そのとき大事なのは、おもしろくただ単に眺めることだろう。

「通常、私は児童書や大人向け漫画のために語りの部分を練り上げますが、こうしたコラ

ージュを制作するときは、私は物語の意図から解放されます。読者がそこに語りを感じ取る
かもしれないということは意識していますが、自動記述のように、私は読み手に方向性を
与えません。物語の方向性は勝手にできてくるものなのです。そうすることで多くの利益をも
たらします……。私の意図はある存在をそこに差し出すことでした。居心地を悪くさせな
い、けれども忘れさせない存在です」リシーはこう説明する。彼女の作品が吹き込んだか
もしれない物語を楽しみながら……。

東京日仏学院のために制作したコラージュは2009年に半年間、京都のヴィラ九条山に
滞在して手掛けた仕事の続きでもある。ヴィラのコラージュは、同様のスタイルで、愛らしく軽
快な実物大の少女たちが明るい線で描かれている。

日本滞在を決意させたのは、「日本文化において、線をこれほどの純度に至らせたもの
を観察し、理解する時間を持ちたいという願望」だった。「私のグラフィスム(画風)を養い、そ
れと対決させること、全体よりも線を練り上げること。漫画は常に私のグラフィック文化の中に
存在してきましたが、それを総合し、私の作品に結実させることがまだうまくできずにいまし
た。それを可能にしたのは、実際のところ日本での生活です。それは、例えば日本の漫画を
読むことよりも、はるかに大きなものでした」

001教室のために、いったん構想が完成すると(図版参照)、イラストが大判用紙に印刷さ
れ、平らに糊付けされ、壁に位置付けし、それからアシスタントの助けを借りて、ポスターを貼
るときと同じ要領で接着する。

「もっとも時期がかわるのは一週間に及んだ配置作業ではなく、デッサンと予備調査の作
業全体です」と彼女は言う。

日本滞在中に、リシーは日本の現代アートにも少し接触した。だが、この分野について

彼女の評価はまだ固まっていない。おそらく彼女が住んだ古都京都から、より深い印象を受けたからだろう。

「〈伝統〉芸術がとても大きな位置を占めていて、現代のアーティストたちに残された空間が少なくなったという気がします。たとえ事態が今日変わってきているように見えたとしても。より些末なことですが、作品をギャラリーに置くためにお金を払わなければならないのを知って私はかなり驚きました……。アーティストに関して言えば、私はMaya Maxxの作品にとりわけ心打たれました。私は彼女に会う機会を持ったのですが、彼女が探求しているものは本当に私に訴えかけてきます。」

日本の冒険は終わっていない。なぜならリュシーは現在京都のある大学のためにガイドブックのカバーを制作中だからだ。彼女は日本の出版社とともに一冊の本を作ることも夢見ている。いつかきっと……。



中村万里子 Mariko Nakamura 女の子とうさぎがなにやらひそかにおしゃべりしている。あっちでもこっちでも。私も参加したいな！ でも、今授業中だよ、と注意したくなる。

栗原邦子 Kuniko Kurihara 教室に入った瞬間は見えない二人を見つけてびっくりします。二人も見つけられたことに驚いている様子。壁の下のほうにある線の上で綱渡りをしているようにも見える。



A watercolor illustration of a young boy with brown hair, wearing a red cap and a blue shirt, lying on his back with his arms raised. A large green leaf is positioned above his head, and a small green object is visible near his right arm.

154



リュシー・アルボン
Lucie Albon
(1977年、フランス、
ボワティエ生まれ)
デッサン画家、BD(バンド・デシネ、
フランスの漫画)の作者、
児童書作家。リュシー・アルボンの
グラフィックの世界には、
夢見る少女、奇妙な精霊、
夢見のいたずら好きの動物が
数多く登場する。2009年には
アーティスト・イン・レジデンス・
プログラムで、関西日仏交流
会館ヴィラ九条山に滞在した。
現在リヨンのアトリエ・ギャラリー
「ボカル」——「ギャラリー兼、
創作の場である孵化の空間」
——で働いている。
<http://luciealbon.net/>
(フランス語)

Lucie Albon «Sans colle. Faire une Reunion de ready mades».
Note projects.2001-2008
centre Pompidou,Musee national d' art moderne,paris

Lucie Albon «Sans colle. Faire une Reunion de ready mades».**Note projects.2001-2008**
centre Pompidou,Musee national d' art moderne,paris

Lucie Albon «Sans colle. Faire une Reunion de ready mades».
Note projects.2001-2008
centre Pompidou,Musee national d' art moderne,paris

Lucie Albon «Sans colle. Faire une Reunion de ready mades».**Note projects.2001-2008**
centre Pompidou,Musee national d' art moderne,paris

Lucie Albon «Sans colle. Faire une Reunion de ready mades».**Note projects.2001-2008**
centre Pompidou,Musee national d' art moderne,paris

Lucie Albon «Sans colle. Faire une Reunion de ready mades».
Note projects.2001-2008
centre Pompidou,Musee national d' art moderne,paris

Lucie Albon «Sans colle. Faire une Reunion de ready mades».
Note projects.2001-2008
centre Pompidou,Musee national d' art moderne,paris

155

Jean Michel Alberola
ジャン＝ミシェル・アルペローラ

#102

un conte pour enfants



“Les mots sont comme des taches de couleur”
「言葉は色の点のようなものだ」



フランス語を学ぶとき、アルファベットを覚えることから始めるが、まさにこれがジャン＝ミシェル・アルペローラが102教室に描いたテーマだ。壁の三面、天上の縁10m以上を走る30cm幅の鮮やかな黄色のフリーズに、アルファベットの最初の24字が濃いグレーの大文字で描かれている。生徒が注目するホワイトボード中央上部の壁に位置するUの文字で、その秩序が乱れる。冷徹に綴られるアルファベットの文字が突如中断し、〈UTOPIE(ユートピア)〉という締めくくりの文字とともに、夢と想像とよりよい世界への希望に向かって開かれる。

J.-M. アルペローラによれば、知識はユートピアへの扉を開くということなのだろうか？ どうやらそうではないらしい。というのも、作品は次のような言葉で終わっているからだ。「一篇の童話」。この文字は赤いイタリック体の小文字で書かれている。理想の世界は子供向けの物語の中にしか存在しないということを示唆しているのだろうか？ 作品をどう解釈するかは見る者の自由だ。芸術家は何がしかの真実を握っているとは主張していないのだから。彼はむしろ自らを〈渡し守〉とみなしている。

「私は情報を伝える者だ。私が興味を持っているのは、イメージと言葉の間の関係であり、文章を作るのはあなたがたのほうだ」

そう断言しつつ、次のようにも述べている。

「アルファベットとは読み方を学ぶことであり、読み方を学ぶことは未開状態を脱し、考えることを学ぶことである……。書かれたものを読むことで、あなたがたは救われ、過去の力を再活性化させる」

102教室の作品は、2000年に制作され「アルファベット練習帳、一篇の童話」(71cm ×71cm)と題されたリトグラフィー(石版画)から着想を得た。オリジナルの作品では、タイムズニューローマン

体の黒文字で21のアルファベットと〈UTOPIE(ユートピア)〉という単語が4行に書かれている。「一篇の童話」は5行目に白い小文字で書かれ、全体が背景の赤色の上に浮き出ている。当時の作品紹介書にはこう記されていた。

「アルファベット練習帳、意味を欠いた本、それは大人たちが子供たちをその中に保っておきたいと願う理想世界を象徴している。そこでは都合の悪いことはすべて隠され、人間は本質的に善人であることが期待され、陰鬱な側面はすべて省かれている。そこには子どもを騙す偽善があり、脇見をさせようという魂胆がある。それは複雑で難解で象徴的な物語とは違い、子供が想像の領域を新たな次元に開きながら自らの考えを構築し、自分の個性を示すことを助ける世界ではない。ここで提起される問題は、このユートピアが誰のためのものかを知ることだ。こうした物語を信じる子供たちのため？ それとも、幼少期という過ぎ去った時代のノスタルジーの中でこうした物語を作る大人たちのためだろうか？」

10年以上の時間、そして1万キロという距離を隔てて、問題はフランス語でも日本語でも手つかずのまま残されているように思われる。なぜなら102教室では、カーキ色の背景に黒いカタカナの表が、フランス語のアルファベット帳と呼応しているからだ。そこでは、日本語音節文字の〈アイウエオ〉が〈ヤ〉まで変化したあと〈ユートピア〉と来て、日本語の〈一篇の童話〉という言葉で締めくくられる。

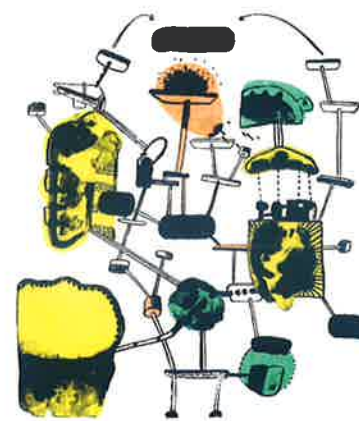
日仏学院の16作品のうち、ジャン＝ミシェル・アルペローラのものは文字(エクリ)にもっとも多くの部分を割いていて、デッサンと絵画を最終的に押しつけているように見えるほどだ。アルペローラはしばしば、その作品の中でテキストとイメージを組み合わせ、そこに個人的な解釈を与える。「言葉は色の表現の一種だ。文章が引き起こすもの、それがイメージだ。言葉を見て、文章をつくったら、今度は絵を描くように誘われる」

古典文化——絵画、哲学、文学——から着想を汲み上げつつ、同時に彼は80年代から継続的に出版活動を行っている。銅凹版、スクリーン印刷(セリグラフィー)、活版印刷、オフセット印刷など、多様な印刷技術を使い、本、ポスター、クリスマスカード、ポストカードやちらしなどを制作し刊行している。彼の目的は自分の作品がより幅広い人々の手に届くようにすることにある。というのも、彼によれば、アーティストの役割とはさまざまな意識を呼び覚ますことだから……。

世界的に知られるJ.-M.アルペローラは、日本に対して特別の愛情を抱いている。彼は何度も日本を訪れ、とりわけ2009年の越後妻有トリエンナーレでは、「リトル・ユートピアン・ハウス 小屋丸」を制作した。それは日本のイメージと日本語の文字がちりばめられた彩色された空間だ。2007年から2009年にかけて、新潟県の人里離れた小屋丸集落で撮影した白黒のドキュメンタリービデオ『小屋丸 冬と春』からひらめいた作品だ(製作:ミラージュ・イリミテ、パリ)。この集落で米を作り、自給自足に近い暮らしをしている最後の6人の村人たちは、それほど遠くない過去の思い出を彼のカメラに打ち明ける。「昔はそこで獲れたものを食べるのが当たり前だった。それが理にかなっていたし、健康によかった」J.-M.アルペローラは、「エコロジーと関わりながら共同体で暮らす6人の村人の思想の自立性」に、またより一般的には「日本人の慎みと賢さ」に深く心を打たれたという。「日本で私の興味を引くのは、時間との関わり、現代性と伝統との共存だ」と彼は締めくくっている。

成瀬康子 Yasuko Naruse 壁と天井のあいだに黄色い帯があり、その上にアルファベットの26文字があるが、その順序が少し違っている。Uから突然“UTOPE”(ユートピア)に変わり、最後に”子どもによる話”と手描きで書かれている。これは言葉遊びだろうか? 予期しない驚きを与えてくれる。

portfolio / Isabelle Boinot



1



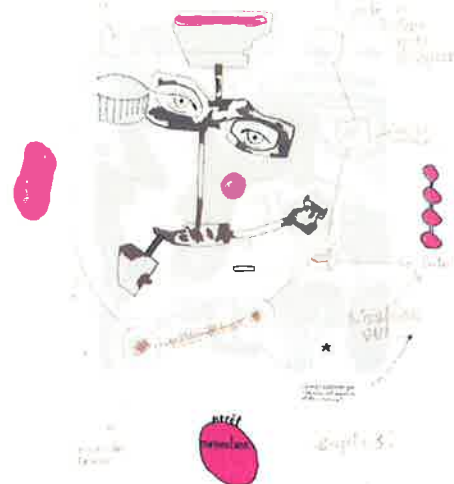
1

¹ Aïcha Hamu «SANS TITRE (BLACKMAIL)»
2009 - Usure sur satin Dimensions variables (environ 250 m2)
Vue de l' exposition En Découdre, Fondation Espace Écureuil,
Toulouse, France, commissariat Alexandra Fau
© A.HAMU Courtesy Galerie Catherine Issert, France

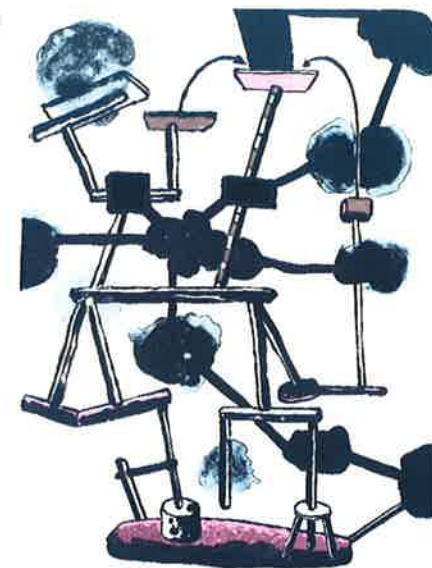
² Lucie Albon «Sans colle. Faire une Reunion de ready mades». Note projects.2001-2008
candre Pompidou, Musée national d' art moderne, paris

³ Lucie Albon «Sans colle. Faire une Reunion de ready mades». Note projects.2001-2008
candre Pompidou, Musée national d' art moderne, paris

⁴ Lucie Albon «Sans colle. Faire une Reunion de ready mades». Note projects.2001-2008
candre Pompidou, Musée national d' art moderne, paris



1



1



ジャン=ミシェル・アルペローラ
Jean Michel Alberola.
(1953年、フランス領アルジェリア、
サイグ生まれ)
デッサン、カラー・ジュ、オブジェ、
彫刻やビデオといった多彩な
ジャンルで活躍するジャン=
ミシェル・アルペローラだが、
「まず第一に画家」であると
彼は言う。その作品には頻繁に
文章(エクリ)が介在し、
古典文化を参照しつつ、
そこに大衆の要素も加味されて
いる。21世紀のフランスを
代表する画家であると同時に、
「フィギュラシオン・リール
(自由具象芸術)」にも
参加している。彼の作品は
ジョルジュ・ポンピドゥーセンター、
ニームのカレ・ダール(現代美術館)、
マルセイユのカンティエール美術館、
ニース美術館の公共コレクションに
展示されている。日本では
2009年に越後妻有トリエンナーレに
参加、2007年から2009年にか
けて新潟の農家の人々の
生活を撮影し、ビデオを制作した。
<http://www.moreeuw.com/histoire-art/jean-michel-alberola.htm>(フランス語)

Isabelle Boinot

イザベル・ボワノ

“Tenter de percer le mystère
「日本の神秘に分け入ろうとするのは、無駄

du Japon me semble une vaine entreprise”
な企てに思える」

#103

人の友達が、よりよく知り合おうとするとき、彼らは何をするか？ そう、一緒にごはんを食べる！ だからイザベル・ボワノは、フランスと日本の出会いを描くためにピクニックの場面を思いついた。103教室のフレスコ画では、日本はウルトラマンの姿で現れ、フランスは作者自身によって体现されている（「少しグロテスクな自画像」と彼女は打ち明けている）。この教室は、二重カーテンと、天井には刳型（モールディング）のあるどちらかというとフランス的な空間だが、そこで二人は日本風に地べたに座っている。彼らのまわりの空間には、両国のシンボルであるオブジェが混交して踊っている。日本のものは、スシ、桜の花、紅葉の葉などで、フランスのものではカマンベール、どんぐりなど。構図の中心には、鶏を頂上に載せた富士山が鎮座している。

一方、二人の会食者はお行儀悪く、立って動き回っている。イザベルは日本国旗の赤丸でボール遊びをし、ウルトラマンはフランスワインのシンボルであるブドウの粒を箸で口に運ぼうとしている。コミュニケーションは言葉より身振りで行われているようで、ありそうもないこのピクニックを通して、二人の会食者は遊びながら、そして互いの文化的相違を気に留めず、一緒に楽しい時間を過ごしている。

「フランスと日本はガストロノミー（美食）の名声を共通に持っているので、食事の場面を描くのは面白いと思いました」

イザベルが「教室の中のアート」プロジェクトのために日本を訪れたのは4度目となる。日本との非常に強いつながりを保っている。

「私は日本が、その特異性が私を運んでいくのに身を任せるのが好きです。特異性とは東洋文化、とりわけ日本を魅力的で唯一の場所に行っている島国性と歴史に由来するものです。この国の〈神秘〉に分け入ろうとしたり、日本人の行動の側面について何か真実を述

べようとしたりするのは、私には無駄な企てに思えます。そもそも、日本あるいは日本人についてのある考えが、その逆もまたまったく正しいということに気付くためには、一つ例を挙げるだけで十分です。コードを把握できないシステムや、意味が理解できない状況、会話、文字、身振りに直面した初心者や外国人の視線は、何としてでも解読し、理解しようとするよりも、はるかに豊かで思いがけない解釈と夢を生み出します」

この視点は、日仏学院のフレスコ画においても十分に表現されている。丁寧で、いくぶんナイーヴなそのグラフィックスタイルは、彼女が各国を歴訪した途中で拾い集めた〈グラフィックの糧〉を書き込んだ旅の手帳を思わせる。



「日本という〈素材〉のさまざまな収集から仕事を始めます。広告雑誌の画像を切り抜く、デッサンする、写真を撮る、私の仕事の糧となる多くのグラフィックの宝と同じように、お菓子の包装、さまざまな小袋を大事にとっておく」

彼女の二冊の手帳——日本についての『スミマセン』と、イタリアについての『プレーゴ』は、彼女が設立した出版社En margeから出版、販売されている。

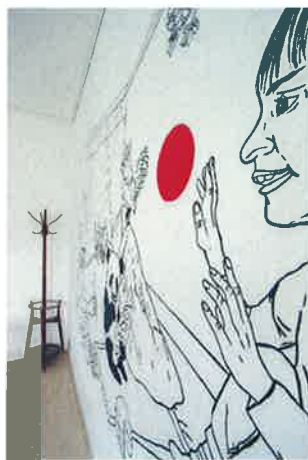
前回の東京旅行の際、彼女は音響（通り、寺、レストラン、スーパー、公共交通機関、自然……）と、日本人が日常に使う言葉、文章、間投詞を集めはじめた。

「それはまったく主観的な報告書、その場所に固有の音響に基づく私個人のアルファベットのようなものを作成するためであり、データを汲みに行けるような音声と視覚の貯蔵庫を作るためでした。このアサンブラージュ（寄せ集め）の作業によって私はさらに新たなメディア、新たな技術（音響モンタージュ、動画）を探ることができました」

イザベルは数多くの日本人アーティストとの関係を築いた。そのうちの二人、花くまゆうさくと河井美咲をフランスに招き、作品集を出版した。この企画ののち、2009年にはパリと地方で一連の展覧会が催された。

「彼らの仕事をフランスで紹介できたのは、彼らにとっても、私にとっても大きな喜びです。今後も出版や展覧会の企画に日本人アーティストを誘い続けるつもりです」

現在、彼女は京都国際マンガミュージアムでの展覧会企画のために活動している。それはピエール・ラ・ポリスや花くまゆうさく作品と共鳴することになるだろう。イザベルの幅広い付き合いには、他の日本人アーティスト、デッサン画家、写真家、和菓子職人たちも含まれる。「日本人アーティストの中でもっとも心を打つのは、素朴さとユーモアと日本で〈へたうま〉と形容されるある種の不器用さとの混合です。そこには壊れやすさのようなもの、〈うまくできたもの〉と〈まずくできたもの〉の間の繊細なラインのようなものがあります。HIMAA(平山昌尚)のよ



うなアーティストは、その代表でしょう。この壊れやすさは、日本の数々の領域で見出せるものです。それが日本を独特のものにしています……。まるで引き算が蓄積よりも価値があるかのよう、最小限度を守るという行為が、一つの作品の力そのもの、適切さそのものを生み出している。いくつかの展覧会の演出もまたとても印象的です。この領域における日本の卓越性を示しています」

アートの分野は別として、この国でイザベルを驚嘆させるのもやはり、もっとも小さく、もっとも壊れやすいものだ。

「交番のカウンターの上に置かれたぬいぐるみ、カフェの木製のテーブルに置かれたとても

小さな花瓶の中の小さな一輪の花、赤いスカーフを巻いた犬、ビスケットの包装、きれいな名刺……。日本では、そうしたものを上手に見せたり、審美的なものに特別の気遣いをしたり、そうしたものに気を配ったりすることが役に立つかどうか、誰も尋ね合うことはない気がします。それは自然で、生まれながらのものなのです……」

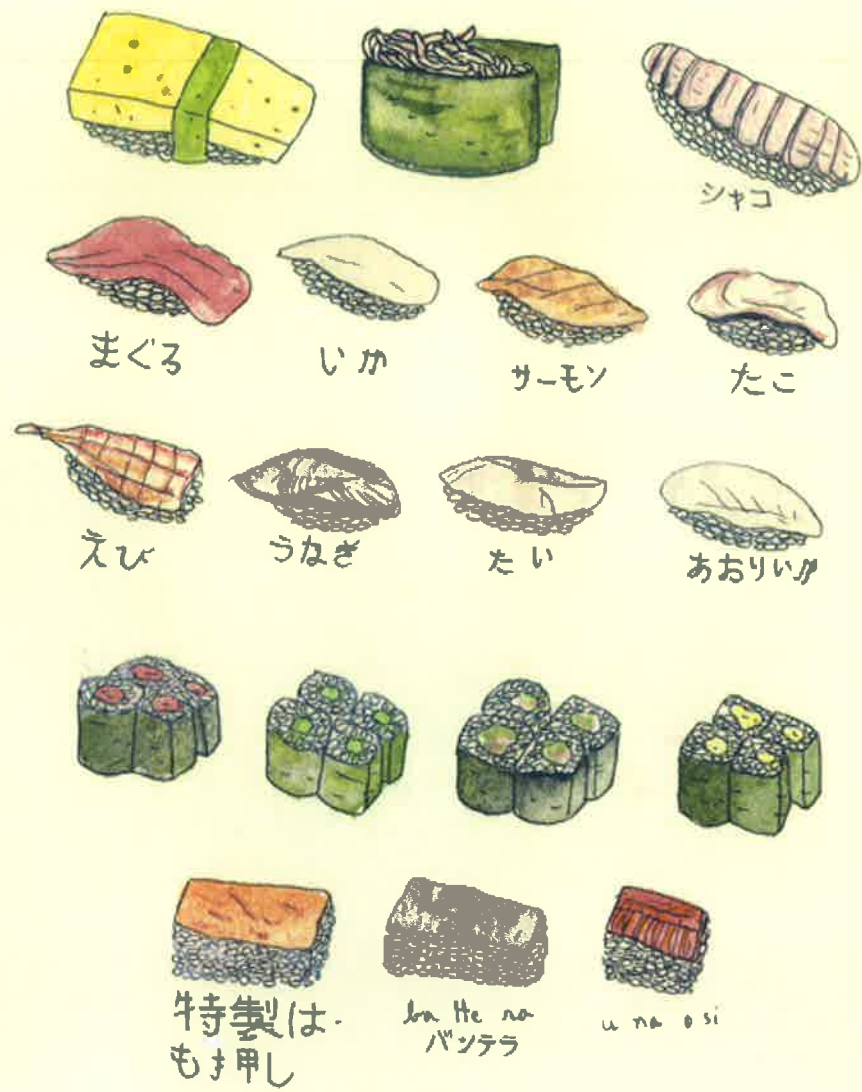


(無題、墨とアクリルのフレスコ画、210 cm×270 cm、103教室)

柿原圭介 Keisuke Kakihara ウルトラマンや、パンダが、富士山が一緒にお茶を囲むという、かなり個性的な、他と交わることにないような、強烈なイメージの中に、ひときわ目立つ赤色の太陽が全体を一つにまとめあげており、非常にユニークで面白い作品です。

栗原邦子 Kuniko Kurihara 作者が夢で見たピクニック？日本と日本のサブカルチャーのファンであることは一目瞭然。でも、なぜパンダがいるのでしょうか。いずれにしても作者は紛れもないフランス人です。カマンベールを忘れないなんて！

portfolio / Isabelle Boinot





¹ Aicha Hamu «SANS TITRE (BLACKMAIL)»
2009 - Usure sur satin
Dimensions variables
(environ 250 m2)
Vue de l' exposition
En Découdre, Fondation
Espace Ecureuil, Toulouse,
France, commissariat
Alexandra Fau
© A.HAMU Courtesy Galerie
Catherine Issert, France

² Aicha Hamu «SANS TITRE (BLACKMAIL)»
2009 - Usure sur satin
Dimensions variables
(environ 250 m2)
Vue de l' exposition
En Découdre, Fondation
Espace Ecureuil, Toulouse,
France, commissariat
Alexandra Fau
© A.HAMU Courtesy Galerie
Catherine Issert, France

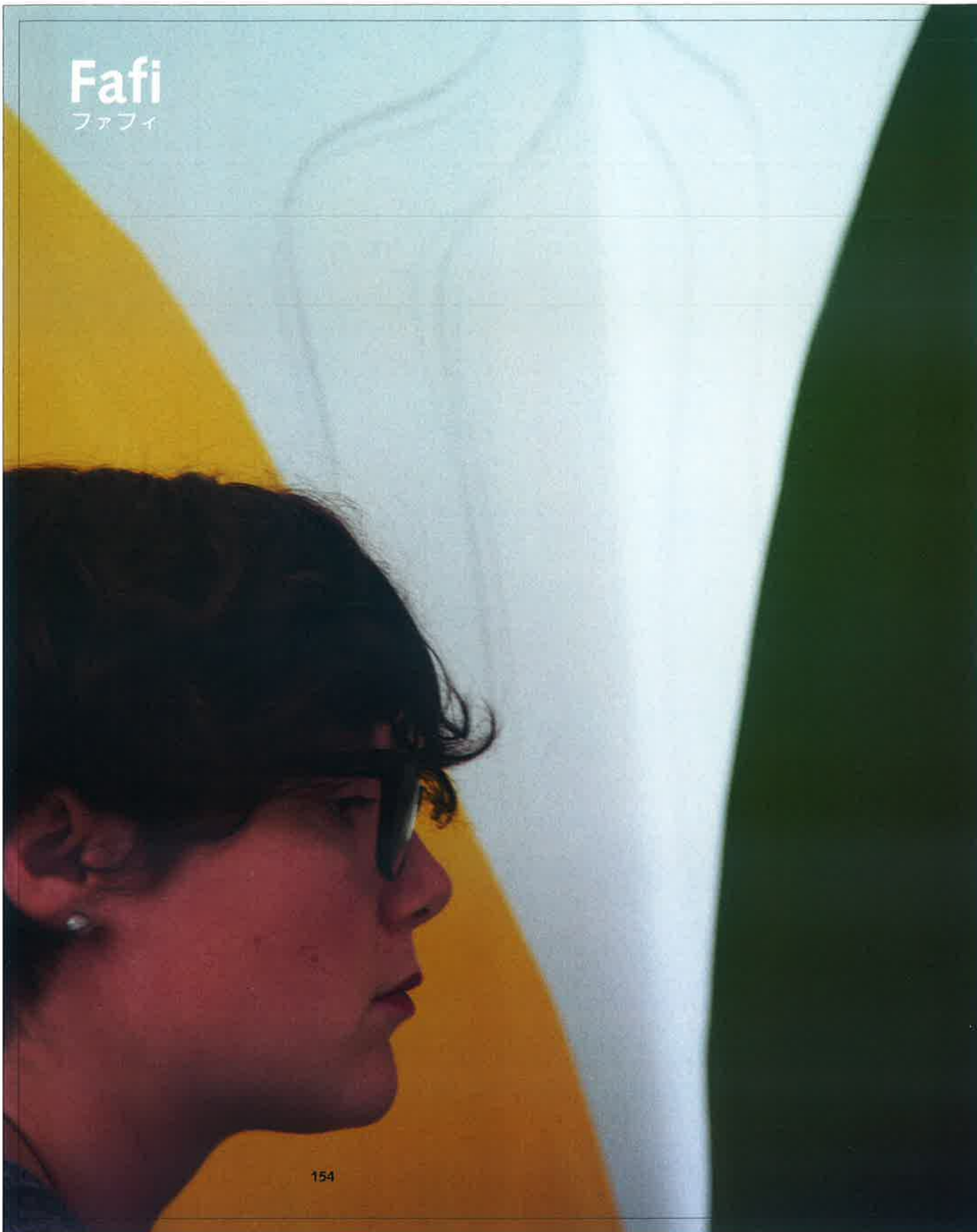
^{3,4,5,6} Lucie Albon «Sans colle.
Faire une Reunion
de ready mades». Note
projets.2001-2008
centre Pompidou, Musée
national d' art moderne, paris

⁷ Aicha Hamu «SANS TITRE (BLACKMAIL)»
2009 - Usure sur satin
Dimensions variables
(environ 250 m2)
Vue de l' exposition
En Découdre, Fondation
Espace Ecureuil, Toulouse,
France, commissariat
Alexandra Fau
© A.HAMU Courtesy Galerie
Catherine Issert, France

⁸ Lucie Albon «Sans colle.
Faire une Reunion
de ready mades». Note
projets.2001-2008
centre Pompidou, Musée
national d' art moderne, paris



イザベル・ボワノ
Isabelle Boiot
(1976年、フランス、
ニオール生まれ)
画家、イラストレーター。
イザベル・ボワノは、さまざまな
グラフィック作品(本、手帳、
パンフレット、イラストボックス、
切り紙など)を制作して、
アンダーグラウンドで販売している。
旅行好きでもある彼女の
手帳は、訪れた国々に関する
思想と観察に満ちている。
「Sumimasen.」(2009、
Éditions En marge)は
2008年に来日した時の
イラスト入りのメモや写真の
コラージュが満載の手帳。
イザベル・ボワノは文化雑誌
les Inrockuptiblesの
ために定期的にイラスト
(挿絵)を描き、プチ・ラルースの
2010年記念出版に参加し、
フランス語の単語にイ
ラストを付けた。
<http://i.boiot.free.fr/>
(フランス語)



Fafi
ファフィ



#104
Pour l'Institut,
j'ai peint des
fajinanettes
"gentilles"

ここに描いたのは、〈善良な〉ファフィンネットよ



1 04 教室の敷居をまたぐとすぐに、実際は一人の人物である実物大のファフィネットが二人、壁の隅でロールシャッパ・テストのように二重に描かれ、いたずらっぽい視線で私たちを迎え入れる。睫毛は念入りにマスカラがされ、黒で縁取られた切れ長の大きな目が四つ、横目で私たちを見据えている。唇はふくよかで、顔はふっくらとし、肌は赤銅色で、両頬にはハートが大胆に描かれている。はと胸の上半身には鮮やかなオレンジの小さなトップをまとい、ゆったりしたスカートは優美な曲線を描いて床まで広がっている。二人は腕を取り合い、それぞれ空いている方の腕に、羊を思わせる奇妙な小さな生き物を抱えている。それは「ビルターク」だとファフィは説明する。「四本の足と、六つの耳と、小さな尻尾を持ち、お尻には温めるためのエプロンをかけた生き物」だ。これらの人物と生き物たちは、想像上の惑星〈深紅色の蒼穹〉に住んでいる。〈深紅色の穹窿〉は、2012年4月に出版された彼女のBD第一作のタイトルでもある(The Carmine Vault, Rizzoli)。「ファフィネットを描きはじめて10数年になるかな。少し行き詰まったように感じ、何か別のことをしたいと思ったので、惑星を作ったんだけど、そこに住むのはファフィネットと、メスでもオスでもなく、地上の動物のいくつかの特徴を持ち、独特の行動をする生き物だけ。この惑星のファフィネットたちは、ミニ戦争を仕掛け合うガリオン船の海賊たちで、彼女たちは決して死なず、〈アルカン化する〉。つまり6、7回死ぬけど、充電した電池のように生き返る。死と再生を繰り返すうちに、ファフィネットたちは無邪気さと独創性を失い、しだいに悪意と悪徳に満ちた存在となっていく。それは善と悪との永久に続く闘いなの」

日仏学院のために、ファフィは〈善良な〉ファフィネットを描くことにした。彼女が初期に描いていたような、頬にハート形を持つあのファフィネットだ。「最初、私は学生の邪魔にならないよう、パステルカラーを使いたいとも思った」だが、ファフィの選択は自然に、コントラストの効いた鮮やかな色彩へと向かい、構図のほぼ完全なシンメトリーが際立たされる。

ファフィは18歳のとき、トゥールーズで壁に絵を描きはじめた。「朝、リセに行く途中、壁に描かれたタグ(スプレースの落書き)に強く興味を引かれた。これを描いたのは誰? そのアーティストたちは何歳だろう? それは男性? それとも女性?と考えました。一晩で描かれたその絵に私は魅せられたの」

独学でアートを学び、強烈な個性を持ちながら、当時はまだティーンエイジャーで自分を見つける必要があった彼女にとって、1994年、トゥールーズのストリート・アーティスト、マドモワゼル・カットとミス・ヴァンとの出会いは重要な意味を持った。

「彼女たちとともに修業をしたっていう感じ。壁は私の表現の場となった。私たちは電車や屋





根にも描き、捕まることもあったわ。それもまた遊びの一部だったの。すばらしいことに、その頃ツールズではどんな場所にも絵が描かれていて、大勢の人がわざわざ見に来てたぐらい。それは1994年から2001年まで続いたけど、その後すべて消し去られ、なくなってしまったわ!」

だが、それも大したことではない。なぜなら数々の都市（東京、ロサンゼルス、ニューヨークなど）に旅行し、また海外での展覧会も次々と実現し、さらに、ソニー、コレット、アディダス、コカコーラ、シャネルといった有名メーカーやブランドからの注文、コラボの依頼も次々に入ってきたのだから。

日本には10回ほど訪れ、メキシコとともに彼女のお気に入りの国だ。「仕事のためもあるけれど、何より楽しむために来てるわ。通りで人々を眺めたり（とくに原宿で）、地下鉄の中の年寄り、若者、女性を眺めたり。とくに気になるのは、日本人の姿勢。私にとって、日本は別の惑星なの」

彼女の描く人物が、ポーズや体形や際立った色彩において時に非常に日本人的なのはそのせいだろうか。というのも、ファフィは彼女のアートにおける漫画の影響を一切、頑として否定しているからだ。

「自分のことをアイロニーやユーモアのあるフランス人、パリ人だと感じている。漫画を描きたいとは思わない。それは私の文化じゃない。それにおそらく私が彼らのコードを借用していないからこそ、日本人に好まれているのだと思う。いずれにせよ、別の文化を真似しようとするは、不器用になる。私は自分自身でいるほうが好きなの」

ファフィはこう強調し、また日本の現代アート作品を評価していると主張する。たとえば、蜷川実花の写真と奈良美智のイラストがとくに彼女の心を打つと言う。

「日本人アーティストの作品は、その線、その繊細さですぐにわかる。なおざりな描写に見えてもそこには考えられた細心さがある。それはまるで彼らがある憤みと闘っているよう。シニカルな態度とポップの誇張によって、また何か吐き気を催させるものを創り出すことで、その枠を超えようとしているみたい。それは私たちフランス人より、はるかに強いものだわ」

渋谷と原宿のいくつかの壁に絵を描いた、とファフィは告白する。「荒れて汚れ、もはや誰の関心も引かない場所を選んで、そこを関心を引く場所にしたわ。それは破壊行為ではない。そこを通る人々は満



私が描きたいのは漫画じゃない

足そうだし、興味を引かれ、写真を撮る人もたくさんいるわ」

壁とBDに女の子を描いてきたファフィは、現在ビデオに関心を向けている。2011年、彼女はフランスのエレクトロ・デュオ〈カルト・ブランシュ〉のシングル *Do! Do! Do!* のプロモーションビデオを制作。その後、日本人アーティスト〈マドモワゼル・ユリア〉のプロモーションビデオ（*Gimme Gimme*、2011年）を制作した。

「ここでも女の子のことで、大人の女性のことを描いているけれど、ビデオも動く絵と考えている。*Gimme Gimme* に男性は一人だけ登場するけれど、女の子たちによって追い出されるの」

すると、ファフィは男嫌い？

「まさか」と慌てて彼女は説明する。「男性は好きよ。でも私のアートには不在なの。男性を描くことには興味ないわ。男らしさは、私の女の子たちや生き物の中に込める方がいいわ」

横山利夫 *Toshio Yokoyama* ファフィの作品は（日本の）漫画的なイメージの強い絵です。彼女はマンガから強い影響を受けているのではないかと思います。現代美術としては、ファフィの作品は私に日本の奈良美智や村上隆を連想させます。ファフィの描く女の子の目つきは奈良美智のかわいらしいけど何か少し不機嫌な、三白眼の女の子に似ている。ファフィの描く女の子は、村上が創るフィギュアの女の子のようにセクシーである。多くの日本人は、私のように、ファフィの作品に親近感を描くと思います。

portfolio / Fafi



154



Aïcha Hamu«SANS TITRE (BLACKMAIL)»
2009 - Usure sur satin Dimensions variables (environ 250 m2)
Vue de l' exposition En Découdre, Fondation Espace Ecureuil,
Toulouse, France, commissariat Alexandra Fau
© A.HAMU Courtesy Galerie Catherine Issert, France

Aïcha Hamu«SANS TITRE (BLACKMAIL)»
2009 - Usure sur satin Dimensions variables (environ 250 m2)
Vue de l' exposition En Découdre, Fondation Espace Ecureuil,
Toulouse, France, commissariat Alexandra Fau
© A.HAMU Courtesy Galerie Catherine Issert, France



1



1



1



1



1

Aïcha Hamu«SANS TITRE (BLACKMAIL)»
2009 - Usure sur satin Dimensions variables (environ 250 m2)
Vue de l' exposition En Découdre, Fondation Espace Ecureuil,
Toulouse, France, commissariat Alexandra Fau
© A.HAMU Courtesy Galerie Catherine Issert, France

Lucie Albon «Sans colle. Faire une Reunion
de ready mades». Note projets.2001-2008
cantine Pompidou, Musée national d' art moderne, Paris

Aïcha Hamu«SANS TITRE (BLACKMAIL)»
2009 - Usure sur satin Dimensions variables (environ 250 m2)
Vue de l' exposition En Découdre, Fondation Espace Ecureuil,
Toulouse, France, commissariat Alexandra Fau
© A.HAMU Courtesy Galerie Catherine Issert, France

Lucie Albon «Sans colle. Faire une Reunion
de ready mades». Note projets.2001-2008
cantine Pompidou, Musée national d' art moderne, Paris

Aïcha Hamu«SANS TITRE (BLACKMAIL)»
2009 - Usure sur satin Dimensions variables (environ 250 m2)
Vue de l' exposition En Découdre, Fondation Espace Ecureuil,
Toulouse, France, commissariat Alexandra Fau
© A.HAMU Courtesy Galerie Catherine Issert, France



ファフィ Fafi
(1972年、フランス、
トゥールーズ生まれ)
グラフィティ画家、イラストレーターで
ある彼女が作ったキャラクター
〈ファフィネット〉は、カラフルで
お茶目でスタイルのよい
女の子たちで、世界中で
人気になっている。
また、洋服のシリーズ商品を作ったり、メーカーの包装を
デザインしたりするほか、
Vogue、Elle Girl、Muteenなどの
雑誌とコラボもしている。
2012年4月には彼女の
BD1作目となる
The Carmine Vault
[漆紅色の狩魔]が
出版された。
現在はパリに拠点を置く。
<http://www.fafinet.net/> (英語)
(104教室)

155

Agathe de Baillencourt

アガット・ド・バイヤンクール



#105

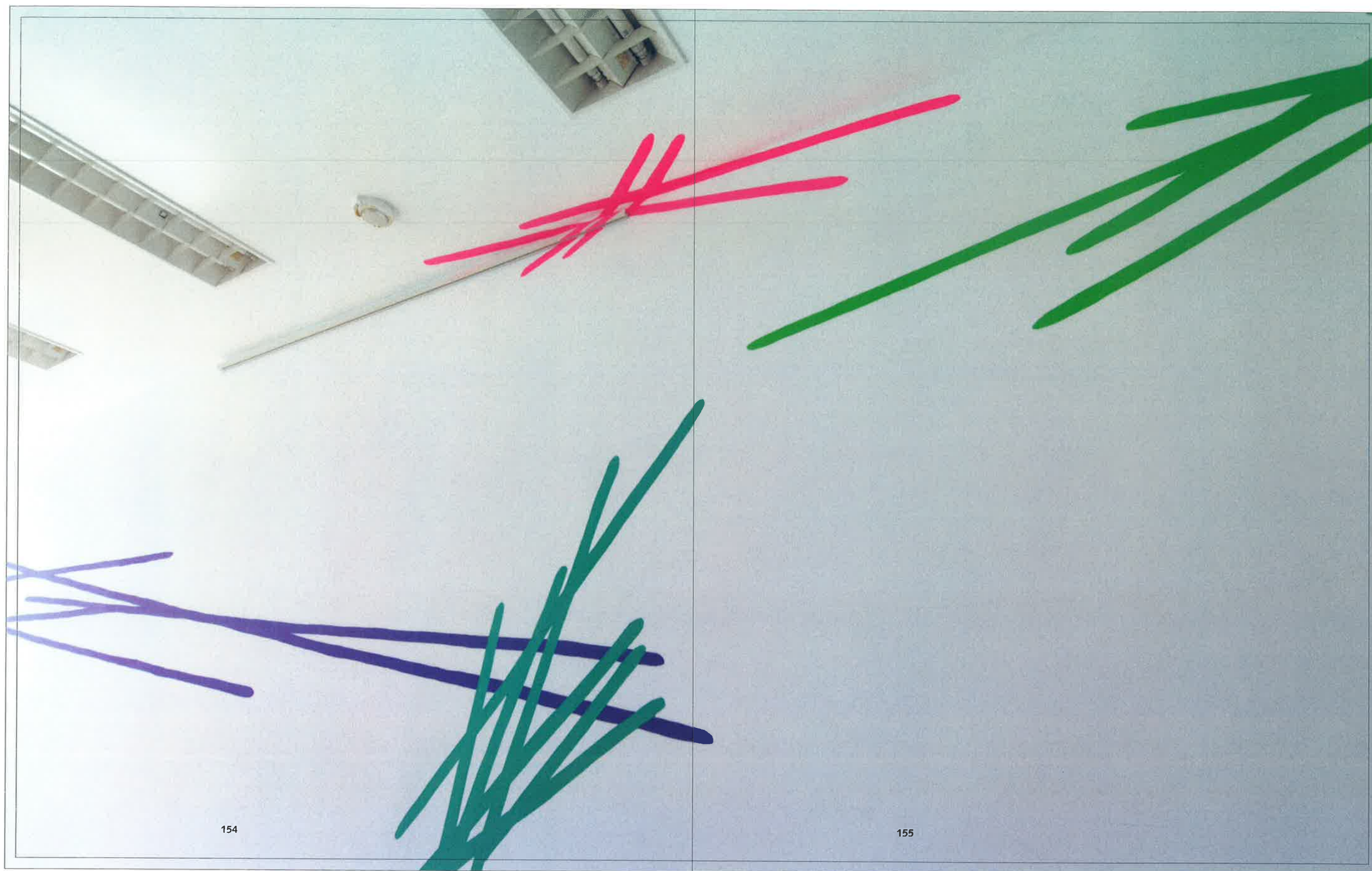
自由という概念を伝達するために

Transmettre

une certaine

idée de la liberté





日仏学院の南棟 1 階、二つの教室に挟まれた 105 教室にはちょっとした驚きが隠されている。ありきたりの教室だろうと入口を入った生徒は、陽気さと自由に満ちた色とりどりの構成に出迎えられる。アガット・ド・バイヤンクール作品に特徴的な、刷毛で塗られた紫、ピンク、緑、青色のパラフル(切り傷のような線)が、純白の壁の表面に伸び、天井と入口右手の柱にもはみだしている。それは散乱したミカドゲーム(ヨーロッパではポピュラーな、竹ひごを使ったテーブルゲーム)のようだ。枠組みと規律を象徴する大時計から、自由に向かって開かれている窓まで、左手の上昇を描く軌道に沿った色とりどりのラインが、味気ない教室から飛び出し、逃避と思索の放浪へと誘う。

「この作品は、退屈したときよく紙に描くような落書きからひらめきました。授業中の生徒の邪魔をするような作品にはしたくなかったし、同時に自由という概念の何かを伝えたいと思いました。人は、とりわけ学習の場では、この概念を往々にして忘れてしまうと思うから」

日仏学院に描かれたのは、たしかに彼女の他の作品よりはるかに控え目だ。とりわけ、同じ時期、2009 年の終わりに、東京の旧フランス大使館が解体前に企画した展覧会「No Man's Land」で制作された作品に比べるとずっと控え目だ。そのとき、大使館の駐車場と女性用手洗いはピンクや青の大きなラインで派手に「標識をつけられていた」。まるで消失しようとしているこの現実をつかみ取ろうとするかのように……。日仏学院の作品は、半年にわたる彼



(無題、アクリルペンで描いた、105教室、教室全体)

女の日本滞在を締めくくるものだった。

「教室という空間はとても興味深い。なぜなら、日常的に使用され、現実の根を下ろした空間だからです。それはギャラリーや美術館の枠組みとはまるで違う。私はいつも具体的な状況で作品を描くという行為にとても興味があります」

アガットは大阪の YOD ギャラリーを通して彼女の日本での仕事を紹介し続けている。そこには彼女の絵画とデッサンが展示されている。しかし彼女はこの国を深く愛していると言いつつも、日本でインсталレーションを成功させることに若干の困難も感じている。

「女性として、アーティストとして、日本で一つの作品を展開し、自由に表現するのは必ずしも簡単だとは思えません。公共の場で制作されるインсталレーションに関してはとりわけそうす」

同様に、日本の空間の特殊性も問題となる。インсталレーションは、作品を創り出す場所の特殊性を考慮しなければならない。だが、日本の建築空間と対峙した外国人のアーティストは、その目標を見失いがちだ。

「日本の通りや家屋の大きさはヨーロッパやアメリカとは非常に異なります。ヨーロッパから来ると、しばしば自分が〈大きすぎる〉というあの奇妙な感覚を覚えます。それが不安定にさせ、私たちの基準が乱される……。日本の室内空間には中心がありません。交互に現れる充満と空虚で構成され、そこをたえず静止と沈黙がよぎります。室内空間を支配しているのは、あるものもないもの、間隔、スペース、空白、休止、ポーズ……」

とはいえ、アガットは落胆することなく、複数の日本人アーティストとの交流を維持している。そのうちの何人かは彼女自身の創作活動の糧となっている。「2009 年 4 月に東京都現代美術館で池田亮司の展覧会を見て、そののち彼とベルリンで会い機会がありました。彼の視覚と音響の作品は、私の大きな着想の源となっています。会田誠の絵画とビデオも大好きです。彼の作品は大いに笑わせてくれます。杉本博司の写真は、空間との関係、普遍性、いくつかのシリーズ(とりわけ海の写真)が放つ靈性で私にひらめきを与えます。草間彌生も、彼女のヴィジョン、急進主義、錯乱的世界ゆえに好きです。建築の分野では、真に例外的な仕事をしている SANAA の建築家たちを挙げておきましょう」

きっと、あと少しの辛抱で、アガットの〈落書き〉とパラフルは、日本におけるフランス的体制の古き壁を越えて、日本の公共空間に入り込んでくるだろう。

横山利夫 Tashio Yokoyama 非常に面白い。一瞬、写真のコピーが貼ってあるのかと思った。よく見ると、茶色の絵の具が盛り上がり、描かれたのだとわかる。セピア色のような茶色がいい。ただ他の明るい色だとどうなるのか想像するのも面白い。



アガット・ド・バイヤンクール
Agathe de Baillencourt
(1974年、フランス、パリ生まれ)
パリから東京、途中のニューデリーや上海、そしてニューヨーク、現在暮らすベルリン、といろんな土地をめぐりながら、アガット・バイヤンクールは自分の足跡を残していく。その切り傷、染み、落書き、多色インスタレーションが都市空間や室内空間を活気づける。エコール・ブルドゥ・パリとセルジイ・ポントワーズ国立美術学校を卒業。最近の作品は、ベルリン(「言葉と荒野」、スタジオクリム、2011年)とニューヨーク(「頭脳への高速道路」、Lu マグナス)で展示された。
<http://www.agathedeb.com/>
(英語)

portfolio / Aicha Hamu



Aicha Hamu «SANS TITRE (BLACKMAIL)»
2009 - Usure sur satin Dimensions variables (environ 250 m2)
Vue de l' exposition En Découdre, Fondation Espace Ecureuil, Toulouse, France, commissariat Alexandra Fau
© A.HAMU Courtesy Galerie Catherine Issert, France

Aicha Hamu «SANS TITRE (BLACKMAIL)»
2009 - Usure sur satin Dimensions variables (environ 250 m2)
Vue de l' exposition En Découdre, Fondation Espace Ecureuil, Toulouse, France, commissariat Alexandra Fau
© A.HAMU Courtesy Galerie Catherine Issert, France

Lucie Albon «Sans colle. Faire une Reunion de ready mades».
Note projets.2001-2008
candre Pompidou,Musee national d' art moderne,paris

Aicha Hamu «SANS TITRE (BLACKMAIL)»
2009 - Usure sur satin Dimensions variables (environ 250 m2)
Vue de l' exposition En Découdre, Fondation Espace Ecureuil, Toulouse, France, commissariat Alexandra Fau
© A.HAMU Courtesy Galerie Catherine Issert, France

Aicha Hamu «SANS TITRE (BLACKMAIL)»
2009 - Usure sur satin Dimensions variables (environ 250 m2)
Vue de l' exposition En Découdre, Fondation Espace Ecureuil, Toulouse, France, commissariat Alexandra Fau
© A.HAMU Courtesy Galerie Catherine Issert, France

Lucie Albon «Sans colle. Faire une Reunion de ready mades».
Note projets.2001-2008
candre Pompidou,Musee national d' art moderne,paris

Lucie Albon «Sans colle. Faire une Reunion de ready mades».
Note projets.2001-2008
candre Pompidou,Musee national d' art moderne,paris



Aicha Hamu

アイシャ・アミユ

154

L'esthétique du simulacre

見せかけ（シミュラークル）の美学

#106

ベ ルベル人の起源を持つアイシャ・アムが106教室の5枚のフレスコ画にヘナ染料を用いたのはごく自然のことだった。アイシャはこう説明する。

「ヘナは、東洋の女性が結婚や洗礼など特別の機会に肌や髪に用いるもの。新婦は足と手を抽象的な装飾模様で飾りますが、その作業には何時間もかかる。ヘナは幸せをもたらし、不吉な眼から身を守るとされています」

ヘナを水と混ぜ合わせた絵の具を、壁に投影したファッションポスターの絵を再現しながら、筆で壁に塗ってゆく。この長く、労力の要る作業は、一点描くの5日かかる。「朝早くからはじめて、終わるのは夜遅く。というも、乾燥時間の開きから生じる色合いの相違を避けるため、デッサンはそれぞれ一行程で制作しなければならないからです」

女性のシルエットが背景に色塗りされず浮かび上がる。彼女たちを飾る暗褐色の模様は、絵の具の乾燥によるひび割れから現れはじめる。

「私の作品にテーマはなく、ただイメージと図像の変化を喚起したかった」とアイシャはいう。それは、彼女のグラフィック作品一般に見られるように、ヘナとレースを使い、あるいは削り取り作業(サテンを針で摩耗させる)によって行われる。

「ヘナを使った模様は変質する運命にあります。時間とともにゆっくり剥がれ落ち、幽霊のような像を浮かび上がらせる。私はグラフィック上の特徴を考慮し、横糸を探しながらこれらの画像を選びました。その横糸とは、肌に描かれる線、ムシャラビエ(張出し格子窓)の線を思わせるものです。その格子窓はアラビア建築において、幾何学模様に切り分けられた木の板でできており、見られることなく見ることを可能にします」

アイシャは2010年の夏、日仏学院の地中海週間の一環で招かれて、教室にこのフレスコ画を制作した。彼女は地中海原産のヘナを使用した。

来日前、彼女は東京在住のフランス人アーティスト、フレデリック・ヴェジェルと会った。彼は日本人が経営するフランスパン屋で、彼女の作品を展示することを提案した。この日本人は畳敷きの屋根裏部屋でアーティストが作品を紹介できるようにしていた。観客は彼女のビデオ『愛と恐怖宗教』に大きな関心を示した。インターネットで集め、モーフィングでつなぎ合わせた赤い口の連続からなる作品だ。

「日本人は、私が使用した形式と素材の多様性にかなり驚いていました。私が出会った日本人アーティストは必ず一つの模範、世に認められたアーティストを引き合いに出しました。彼らには師弟関係がとても大事なようです」

東京で、アイシャは川松康徳とも知り合い、彼は東京とエディンバラですで行われた一連

の展覧会ダバダへの参加を彼女に勧めた。

「私はとりわけ〈アンダーグラウンド〉的な場所に通いました。〈アンダーグラウンド〉というのは、アーティストたちがいかなる団体からもギャラリーからも援助を受けず、それにもかかわらず、集団力学によって、多くの催しを企画することに成功しているという意味においてです」

アイシャは日本人の美的感覚、とりわけ伝統建築、現代建築における美的感覚に感嘆しているという。



(無題、ヘナ染料を使ったデッサン5作品、各60 cm × 80 cm、106教室)

「日本人は設計図による昇華の感覚を持っています。私はまた彼らが事物を近似的に書き写すセンスにも大変驚きました。それは滑稽であると同時に、詩的な様式の混合の中で復元されたキリスト教の教会のようです。私はこれらの建造物が礼拝の場所というより、まず何より祝祭の場として使われていたと聞きました。シミュラクル(見せかけ)の美学は、私がインスタレーションに取り組む方法においてもとても重要なポイントの一つです」

より個人的にアイシャが興味を持ったのは、日本社会における日本人女性の立場だ。

「日本ではフランスにおけるよりいっそう、女性とはいえない状況にあることがわかりました。日本人女性は結婚前には子供っぽい傾向があるように思えます。それから母となり、妻となり、家庭に尽くさなければならないのです。」生きた図像から変質したシンボルへ、そしてそれから崩壊へ……。アイシャの東京のフレスコ画、テーマはないって、本当？

横山利夫 Tashio Yokoyama 非常に面白い。一瞬、写真のコピーが貼ってあるのかと思った。よく見ると、茶色の絵の具が盛り上がり、描かれたものだとわかる。セピア色のような茶色がいい。ただ他の明るい色だとどうなるのか想像するのも面白い。

portfolio / Aicha Hamu



154



アイシャ・アミュー
(1974年、フランス、アヴィニョン生まれ)
切り絵、刺繍、
リマスター写真、
ヘンナ染料を使ったデッサンなど、
身近な小物から、巨大な
インスタレーションまでを制作。
ニース在住の若手アーティスト、
アイシャ・アミューは、ロックグループ
「アルファ60」の歌手兼
ベーシストでもある。その作品はこ
ろ々々としているのだ。
「デュシャン以降、どうしてな
おれ儀正しく描くことができるの？」
アイシャは南仏、ヨーロッパ、
日本で展覧会を行っている。
[http://documentsdartistes.org/
artistes/hamu/page1.html](http://documentsdartistes.org/artistes/hamu/page1.html)
(フランス語)

Aicha Hamu «SANS TITRE (BLACKMAIL)»
2009 - Usure sur satin Dimensions variables (environ 250 m2)
Vue de l' exposition En Découdre, Fondation Espace Ecreuil,
Toulouse, France, commissariat Alexandra Fau
© A.HAMU Courtesy Galerie Catherine Issert, France

Aicha Hamu «SANS TITRE (BLACKMAIL)»
2009 - Usure sur satin Dimensions variables (environ 250 m2)
Vue de l' exposition En Découdre, Fondation Espace Ecreuil,
Toulouse, France, commissariat Alexandra Fau
© A.HAMU Courtesy Galerie Catherine Issert, France

Lucie Albon «Sans colle. Faire une Reunion
de ready mades».
Note projects.2001-2008
candre Pompidou, Musee national d' art moderne, paris

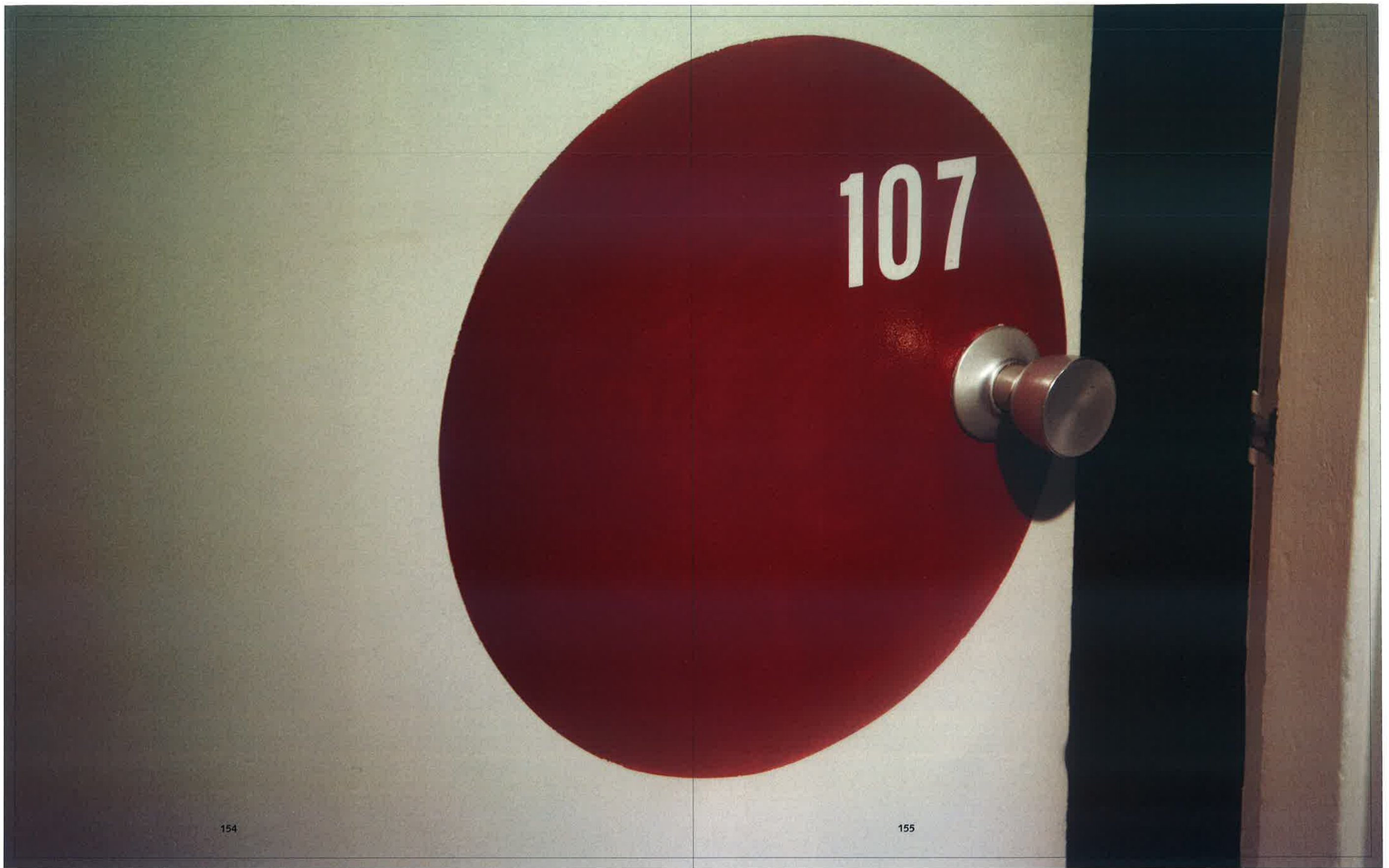
Aicha Hamu «SANS TITRE (BLACKMAIL)»
2009 - Usure sur satin Dimensions variables (environ 250 m2)
Vue de l' exposition En Découdre, Fondation Espace Ecreuil,
Toulouse, France, commissariat Alexandra Fau
© A.HAMU Courtesy Galerie Catherine Issert, France

Lucie Albon «Sans colle. Faire une Reunion
de ready mades».
Note projects.2001-2008
candre Pompidou, Musee national d' art moderne, paris

Aicha Hamu «SANS TITRE (BLACKMAIL)»
2009 - Usure sur satin Dimensions variables (environ 250 m2)
Vue de l' exposition En Découdre, Fondation Espace Ecreuil,
Toulouse, France, commissariat Alexandra Fau
© A.HAMU Courtesy Galerie Catherine Issert, France



155





Psychoze

ブシコース

"J'ai voulu échanger et partager, pas provoquer"

「僕が望むのは交換し、共有することであって、挑発することではない」

#107

ベ

仏学院の一階受付の裏手、細い廊下の奥にある語学ラボ 107 教室には、フォーマイカの机とパソコンスクリーンの殺風景な列が並んでいる。そこに意表をつけて現れるのが、フランス・ストリートアートとグラフィティを代表するもっとも有名な人物プシコーズによって描かれたサイケデリックなフレスコ画だ。入口右手の壁には、目の覚めるような青を背景に、色鮮やかなファランドール(プロヴァンス地方の民族舞踊)を踊る人々が描かれている。「フランスで今回のプロジェクトを考えたとき、まずグラフィティ文化の基本であるカリグラフィ(装飾文字)と言葉から出発した。フランス語と日本語の言葉を使って遊び、両言語のつながりを見つけるのは理にかなっていると思った。フランス語の中でよく使われる日本語のリストを作り、それをカラフルな構図の中に挿入したんだ。それはまた両文化の出会いを象徴し、日仏学院の使命を強調しているからね」

入口左手の壁には、彼によれば〈愛の守護天使〉が描かれている。それは彼が世界中で描いている象徴的人物であり、「空中浮揚し、愛の象徴である心臓を守護する翼の生えた天使の表象」である。「ときに価値観が相反し、連帯よりも個人主義のほうが強い社会において、このメッセージは根本的なものに思える」

エピソードを一つ紹介しよう。最初プシコーズは、背景の中心からずれた場所に、旭日旗の光線を放つ赤い太陽を描いていた。それは「構図に遠近法的視野を与え、愛の放射を象徴するため」であり、軍旗だとは思ひもしなかったのだ。この旗の再現はまずい解釈を生むかもしれないと知り、プシコーズは背景を夜の闇に塗り替えることにした。「この一件によって、日本文化と真に出会えたとも言える。この作品の修正に立ち会った人々は、彼らの文化を尊重し、彼らの文化との接触の中で学ぼうとする僕の意志を感じ取ってくれたのではないかと思う。グラフィティはいつも破壊的側面、人に訴えかけるエネルギーを持ってきた。人々から正反対の反応があったとしても僕は驚かない。僕が望むのは交換し、共有することであって、挑発することではない」

しばしば破壊的と形容される芸術活動に属するアーティストにしては、この協調的な態度は驚くべきものだ。だが、プシコーズにとって「グラフィティは、反抗や既成秩序への挑発という欲求より、表現の自由という欲求により深く結びついている。グラフィティは常にストリートに属するが、それはまだ若い文化だ。だから、一種の〈大衆化〉を通じて、より多くの人々に認められ、理解されなければならない。このカルチャーは、表現の自由を強烈に象徴しているだけに、アートの民主化にも関与していると言える」。

それゆえプシコーズは、同業者でもある、204 教室の RCF1 のエリート主義的で排他的な着

想とは根本的に異なっている。もっとも、彼は日仏学院の RCF1 の作品をグラフィティではなく、「この活動から出た一人のアーティストの仕事」とみなしている。

「僕は言葉を書き、鮮やかな色を使い行為として、グラフィティ文化のコードを用いた。でも他の二面の壁はこの学院とその利用者を考えながら創造した」

25 年以上活動続けるプシコーズは最近、グラフィティのコードをもとにキャンパス上に描く絵画に関心を向けている。また肖像と人物の彫刻にも挑戦し、それをパリのカタコンベの壁で試みている。だが彼は常にグラフィティ画家を名乗っている。「ストリートは僕の燃料であり続ける。グラフィティ画家第一世代のうち、僕はストリートで現役の数少ない存在の一人だと思う。その意味で僕は自分を渡し守、異なる世代の導きの糸、寺の番人のようなものだと思っている」

彼はまたグラフィティにおけるフランスの特殊性の番人でもある。「アメリカ人はグラフィティにメッセージとエネルギーをもたらした。ヨーロッパ人は大きなフレスコ画を創り、その美しさで芸術的側面に貢献した。その両面によって確実にこの文化が見直しされたと思う」

彼によれば、東京は手つかずの、あるいは見捨てられた空間がほとんどないため、都市芸術には適さないと言う。だが一方で、この都市は際限なく巨大で、それはグラフィティそのものともつながるものだとも感じている。「度を越した近代的ビルを建てる行為と、常に境界を押し広げるグラフィティ文化には共通するものがある」

パリでの展覧会の際、プシコーズは日本人のストリートアーティスト KAMI と出会った。「日本人アーティストはグラフィティ文化に精神的、哲学的次元をもたらす。ストリートで絵を描く行為の背景には、常に何か目的がある。この運動の基盤には、ルールを破りたいという衝動があるが、日本人はその感覚を超えているんだ。つまり、それはすべてがコード化された社会における表現の自由のための権利要求なのだ。究極の例として、すべての要素が計算された禅の庭園を挙げることができる。グラフィティはこうした文化の対極にあり、もっと自由気ままに表現できる。僕が学院に描いた〈守護天使〉は、僕が東京で実現したいと願っているものの予告でもある。東京のボランティアのコミュニティと協力して、エネルギーを集結させ、どこかのファサードに作品を描くことができたらと夢見ている。その作品は僕らの出会いの成果となるだろう」

横山利夫 Mitsue Yamamoto 手をつなぐ子どもたち。きれいな色。なんだか楽しそうな雰囲気。幼稚園の壁にぴったり。と思って近づいて見ると、ちょっと様子が違う。何ですって？ 芸者、ハラキリ、ヤクザ、カミカゼ？ 空手、盆栽、マンガ、カラオケ？ 東京、富士、ゆうこ。あきら、

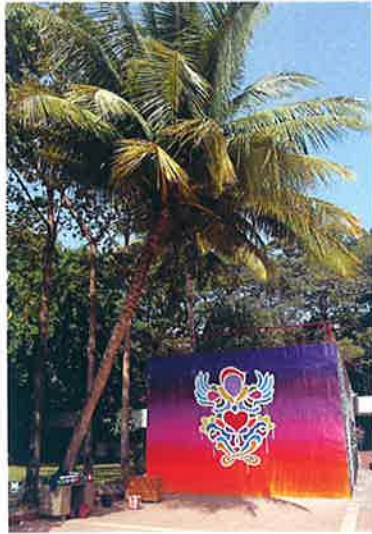


〔ボノム〕、アクリル画、110 cm×427 cm、107教室）

portfolio / Aicha Hamu



1



Psychoze
Psychoze
(1969年、ブローニュ＝
ビヤンクール生まれ)
アレックス・ストリピン、
別名Psychozeが、初めて
グラフィティを描いたのは
15歳のとき。同世代のグラフィティ
画家の中でも、都市のくすんだ
壁を色彩とグラフィティで
彩り続ける数少ない一人だ。
絵画の分野でも活動し、
最近ではバリのカコンベで
彫刻作品に挑戦している。
2009年、彼はバリのグランパレで
TAG展に参加し、
フランス・ストリート・アートの名を
高めた。パリを拠点とし、
1984年にアーティストJonOneに
よって創設された
グラフィティ画家の国際的
グループ「156 All Starz」の
メンバーでもある。
<http://www.psychoze.com/>
(フランス語、英語)



Aicha Hamu«SANS TITRE (BLACKMAIL)»
2009 - Usure sur satin Dimensions variables (environ 250 m2)
Vue de l' exposition En Découdre, Fondation Espace Ecureuil,
Toulouse, France, commissariat Alexandra Fau
© A.HAMU Courtesy Galerie Catherine Issert, France
Lucie Albon «Sans colle. Faire une Reunion
de ready mades». Note projects.2001-2008
candre Pompidou,Musee national d' art moderne,paris
Aicha Hamu«SANS TITRE (BLACKMAIL)»
2009 - Usure sur satin Dimensions variables (environ 250 m2)
Vue de l' exposition En Découdre, Fondation Espace Ecureuil,
Toulouse, France, commissariat Alexandra Fau
© A.HAMU Courtesy Galerie Catherine Issert, France
Lucie Albon «Sans colle. Faire une Reunion
de ready mades». Note projects.2001-2008
candre Pompidou,Musee national d' art moderne,paris

1



Vincent Lefrançois

アガット・ド・バイヤンクール

“La poésie d'un lieu tient à ses
habitants”

「場所のポエジーは住民とつながっている」

#108

18

年前から福岡で暮らすフランス人アーティスト、ヴァンサン・ルフランソワの詩的で暗示的なフレスコ画は彼の漫画〈歩き回る瞑想〉と同じ流儀で読むことができる。

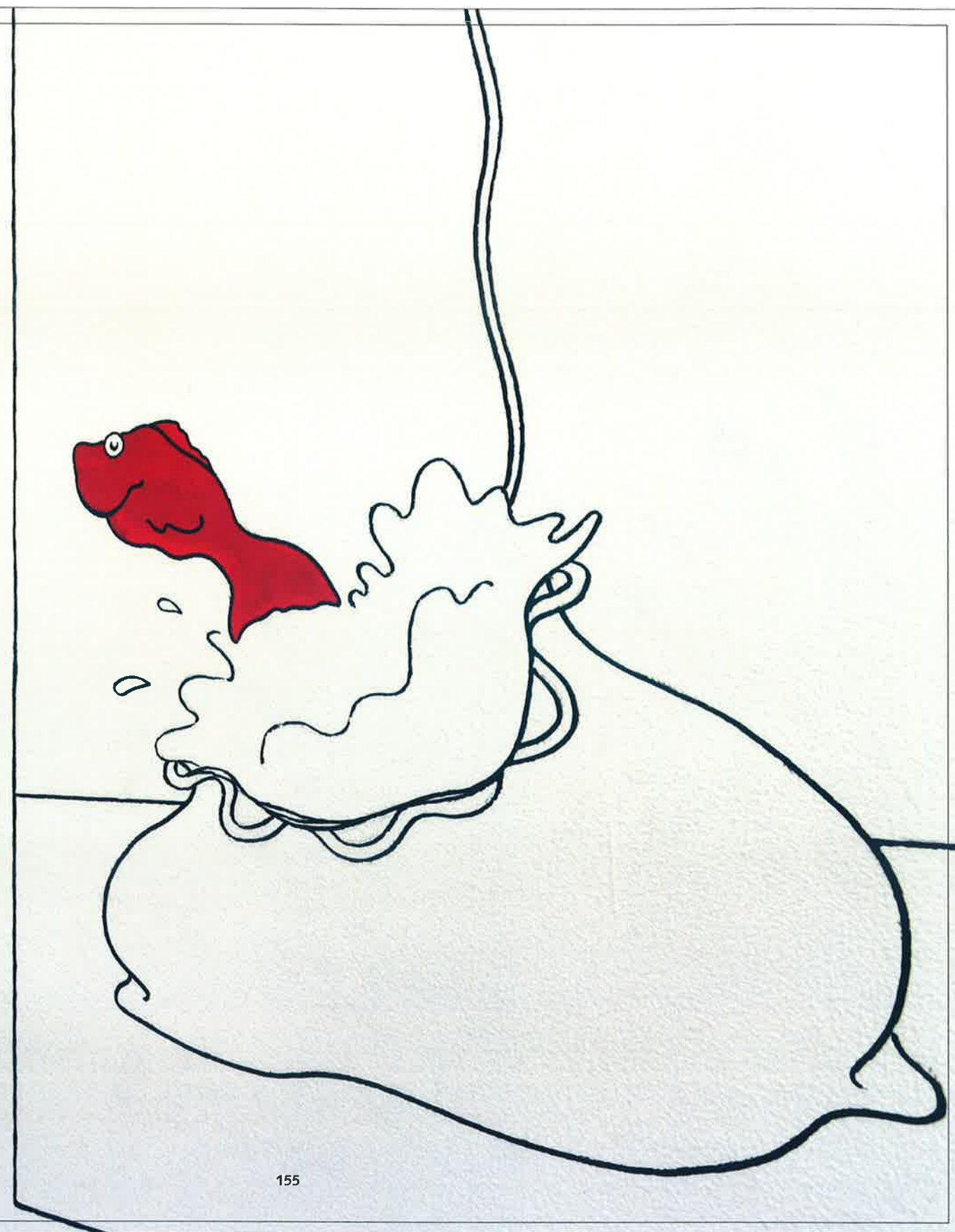
今風の女の子二人が小さな金魚をつかまえるが、逃げてしまい、東京の街——渋谷、浅草、新宿、巣鴨といった前衛的な街や伝統的な街——をあちこちさまよった後、飯田橋の学院から近い、コイが泳ぐ神社の池に飛び込む。そこで金魚は〈水を得た魚〉に戻る。

それは自分のルーツを探す日本人の隠喩であり、金魚は物語において導きの糸の役目を果たし、モノクロの作品に生き生きとした色鮮やかなタッチを与えている。空飛ぶ金魚はヴァンサンの夢の世界に属するものだ。彼にこの着想を与えたのは、福岡の自宅から遠くない柳橋の古くからある市場、より正確に  はこの市場の商人たちの一人である80歳ぐらいの魚屋だ。

というのも、ヴァンサンにとって場所のポエジーとは、そこに住み、そこを横切る人々とも結びついているからだ。

「ある日、市場をぶらついていると、この小さな老人が私のほうにやってきて、私がどこから来たのか尋ね、そして彼はバリについて話しはじめました。それから私は彼と市場をデッサンしはじめ、空飛ぶ魚のアイデアはほとんど自然に生まれたのです。この小さな老人がいなかったら、この市場が存在しないような気がしました。ある日、私は彼に何枚かのデッサンをあげました。引き換えに、彼は私に一匹の魚をくれたのです」

ヴァンサンの作品のうち、日仏学院の企画担当者をもっとも魅了したのは魚の絵で、彼にこの作品を注文することになった。同時に2011年5月には、「放浪」展が日仏学院で展示された。というわけで、魚のアイデアはこのフレスコ画にぜひとも必要なものであり、いわば敬



意を表することでもあった。

「他には、〈放浪〉展と直接的関係のある何か、つまり東京の实在の場所と関係ある何かを生み出さなければなりませんでした。私はここで暮らしているわけではありませんから、東京は私にとっていくつもある都市のうちの一つであり、それを私は発見し、絵になると思いました」

ヴァンサンはまず、彼の個人的趣味(巣鴨)や、グラフィックの質(フィリップ・スタルク作のアサヒビールのフラムドールがある浅草)で選んださまざまな場所の写真を撮った。次に、写真をもとに紙にデッサンを描き、そのあとセルロイドに描き写した。最後にオーバーヘッドプロジェクターを使って、黒鉛、そのあと黒フェルトペンで壁に複写し、縮尺の相違に応じて細部を書き足していった。

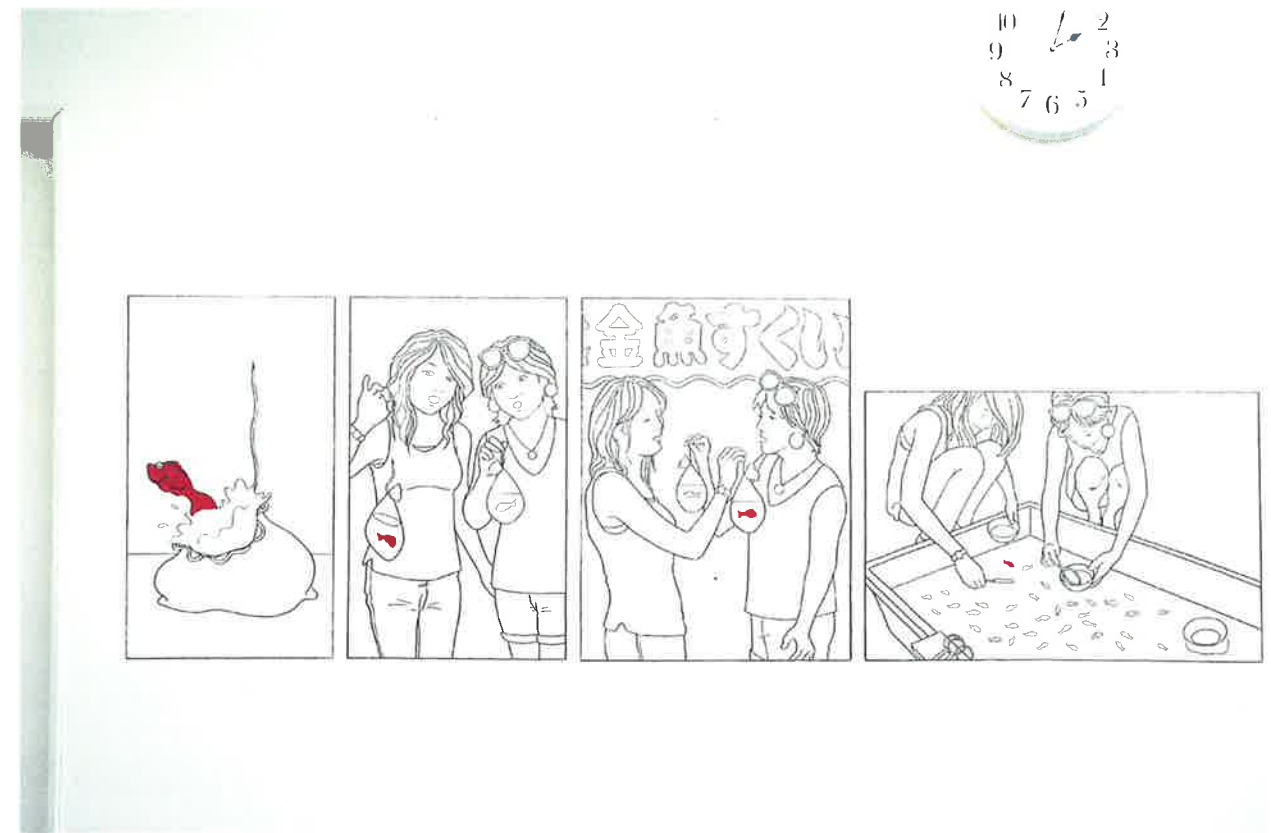
ヴァンサンにとってもっとも重要なのは、場所を忠実に再現することだ。

「私は現実をごまかしたくありません。たとえ自分なりにうまく修正できたとしてもです。東京に存在しないチェーンレストランを描くことはできません。それでは人々に訴えかけないでしょうから」

ヴァンサンにとって大事なことは、彼の物語が見る者になんらかの感動を与えることだ。「放浪『柳川』」という漫画では、水路が通る九州の風情ある街に生活しながら、住民の誰一人、この水路を糧に生きているという意識がないことに主人公(ヴァンサン)は驚く。それで、村が水路を失い、虚空に漂う船と住民が描かれている。

「放浪『出発間近2』」では、日仏学院の近くの神楽坂でデッサン画用紙を腕にかかえ、スケッチによりよい場所を探して出かける年金生活者のグループが描かれる。この画家の卵たちは最後に日仏学院にたどりつき、夢の国パリに連れて行くため2階で彼らを待っているバトー・ムーシュに乗り込む……。

「〈放浪〉(15カ月にわたり「週刊朝日ウィークリー」に掲載された)のコンセプトは、何年も前にうちの近くの荒戸地区をぶらつきながら浮かびました。その地区はひどいマンション群に侵略されはじめてい

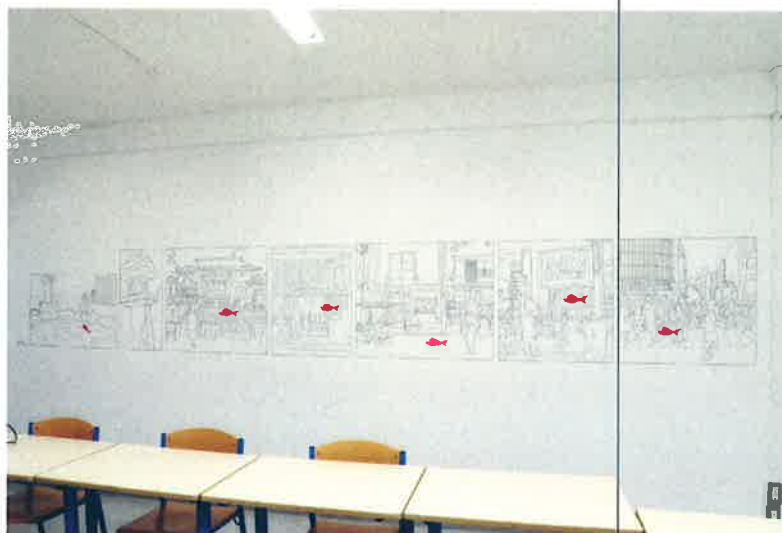


地区をぶらつきながら浮かびました。その地区はひどいマンション群に侵略されはじめていました。私はそこに、侵略者に抵抗し続けている古い家屋からなる小さな飛び地を見つけました。この場所を今も存在させているのは住民のエネルギーだと思います。それで私はおもち屋を営む老人の物語を想像しました。一人の日本人女性がある日、私のデッサンを見て涙を流していました。彼女の祖母が同じような家に住んでいたと、彼女は私に話してくれました」

彼の物語から立ち昇るポエジーとノスタルジーでたしかに日本人の心を打つ。だが、まさに彼の語りが非常に省略的で詩的だという事実のために、彼を漫画家として認めさせるのを難しくしている。

「私は読者の創造力と想像力に訴えかけています。が、読者が一目で私のデッサンを理解することはまれです。人はしばしば私に言います。『あなたが描いているのは漫画ではなく詩です』と」

人気漫画はアクションを膨大に引き伸ばし、各行程は作品がすばやく読めるより、最小限のディテールで描写される。もちろん谷口ジローのような一部の日本人漫画家はより瞑想的で内省的なアプローチをしているが、こうした漫画家は多くない。それゆえ、ヴァンサンが作品のいくつかをカステルマン社向けにフランス語に翻案しているのは偶然ではない。もう一つのずれた世界のドアを開くために。



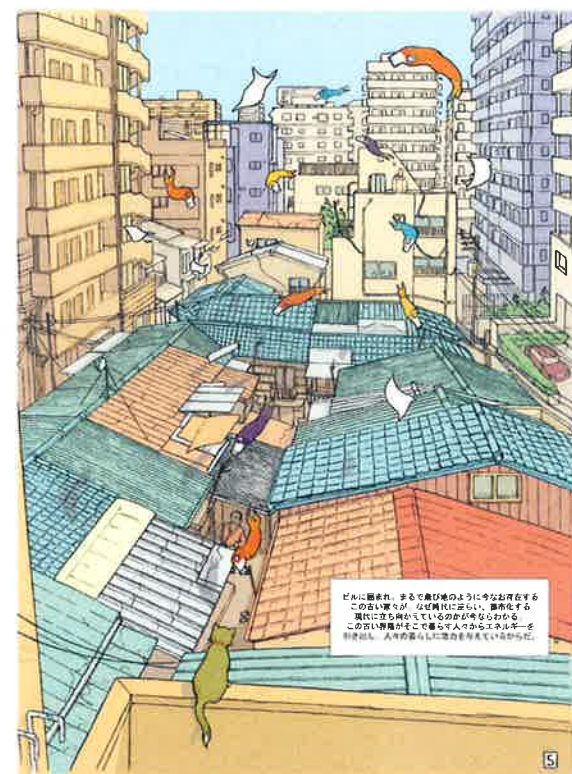
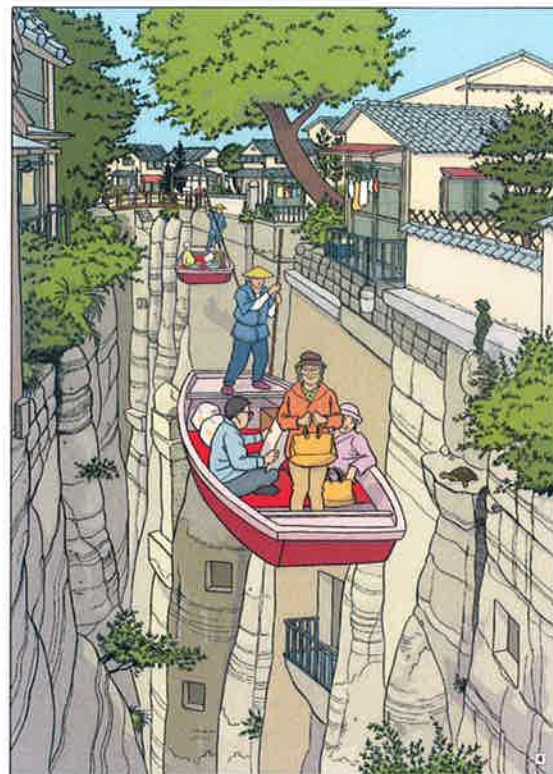
柿原圭介 Keisuke Kakiharu モノクロ写真のように、線のみで日本の風景を描きつつ、赤い金魚がそれらの風景を有機的に結びつけている。どこかアルバムをめくっているような、懐かしささえ感じられます。



高村忠良 Tadayoshi Takamura 金魚すくいの生け簀から飛び出した金魚が日本のいろいろな風景の中を回遊して、最期は池に入っていく。最期の池から再び最初の生け簀に戻るのかもしれないと想像すると、そこに輪廻転生を感じる。



portfolio / Vincent Lefrançois

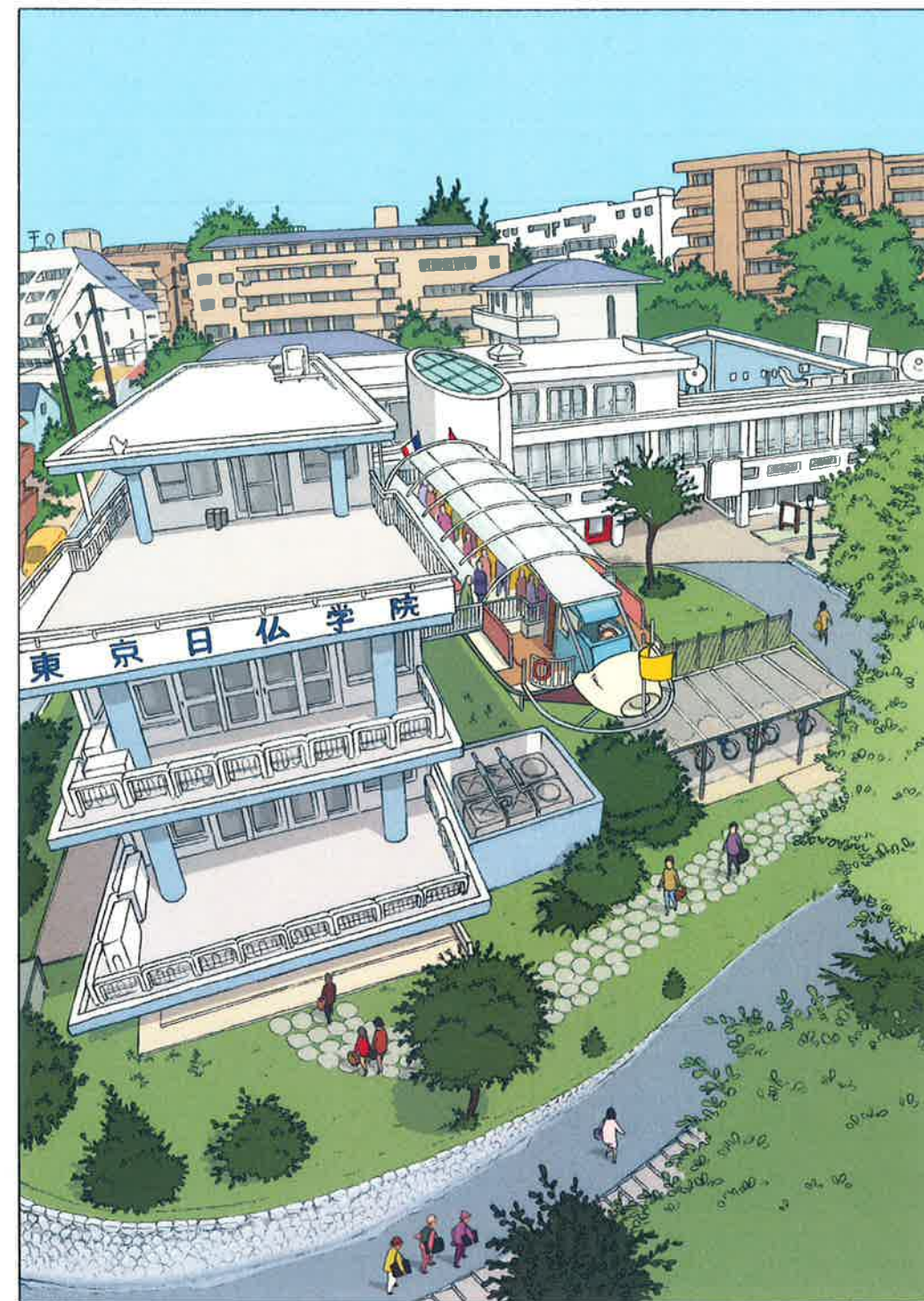


Lucie Albon «Sans colle. Faire une Reunion de ready mades». Note projects.2001-2008
centre Pompidou, Musee national d' art moderne, paris

Lucie Albon «Sans colle. Faire une Reunion de ready mades». Note projects.2001-2008
centre Pompidou, Musee national d' art moderne, paris



ヴァンサン・ルフランソワ
Vincent Lefrançois
(1966年、フランス、ルーアン生まれ)
1991年から福岡に住む
ヴァンサン・ルフランソワは、彼の
「アドリエデカレ(ひねっている)」
でデザインとBDを
生み出している。その作品は
私たちが彼の「放浪」
(2008年から2010年にかけて
朝日新聞に掲載された彼の
シリーズのタイトル)の詩的世界、
宇宙空間のどこか、フランス・
日本の間のどこかに運んで行く。
<http://www.atelierdecale.net/>
(日本語、フランス語)



Lucie Albon «Sans colle. Faire une Reunion de ready mades». Note projects.2001-2008
centre Pompidou, Musee national d' art moderne, paris



Jean-Luc Vilmouth
ジャン＝リュック・ヴィルムート

Démultiplier

le sens des objets quotidiens

日常のモノの意味を増大させること



154

#202

155



202 教室の入口に面した壁で私たちを迎えるのは、ページの無印良品の木製の掛け時計と、それを取り囲む直径 2.4m、8B の黒鉛で根気よく描かれた同心円だ。何秒か観察していると、見る者は一種の催眠状態に陥る。お気に入りのミュージシャン、フィリップ・グラスのやはり催眠性のある音楽のリズムに合わせて、彼がこの作品を制作するのにまる二日かかった。

「こんなふうに作品に取りかかっていると、一種のトランス状態になるが、私はこの状態が気に入っている」と仕事の最中に彼は打ち明ける。その間も彼の黒鉛は壁の表面に揺るぎない線を引き続ける。でこぼこに出会うたび、かすかにもとの地塗りから逸れながら。ジャン＝リュック・ヴィルムートは、われわれの人生にちりばめられたようなこうした偶発事が好きだと言う。「歩むべき道はけって決まっていはいない」、一つ一つの逸脱が、平行でなければならない次の円において考慮に入れられる。その結果、作品全体がかすかにぐらついた外観を取るようになる。

「同心円は 3 月 11 日の地震の衝撃波を思わせる」と、80 年代はじめからすでに 20 回ほど滞在し、日本と長い愛の物語を紡いできた彼は説明する。2011 年の大災害は彼を動転させた。

202 教室の作品はまた、教室という空間での時間の研究にもなっている。

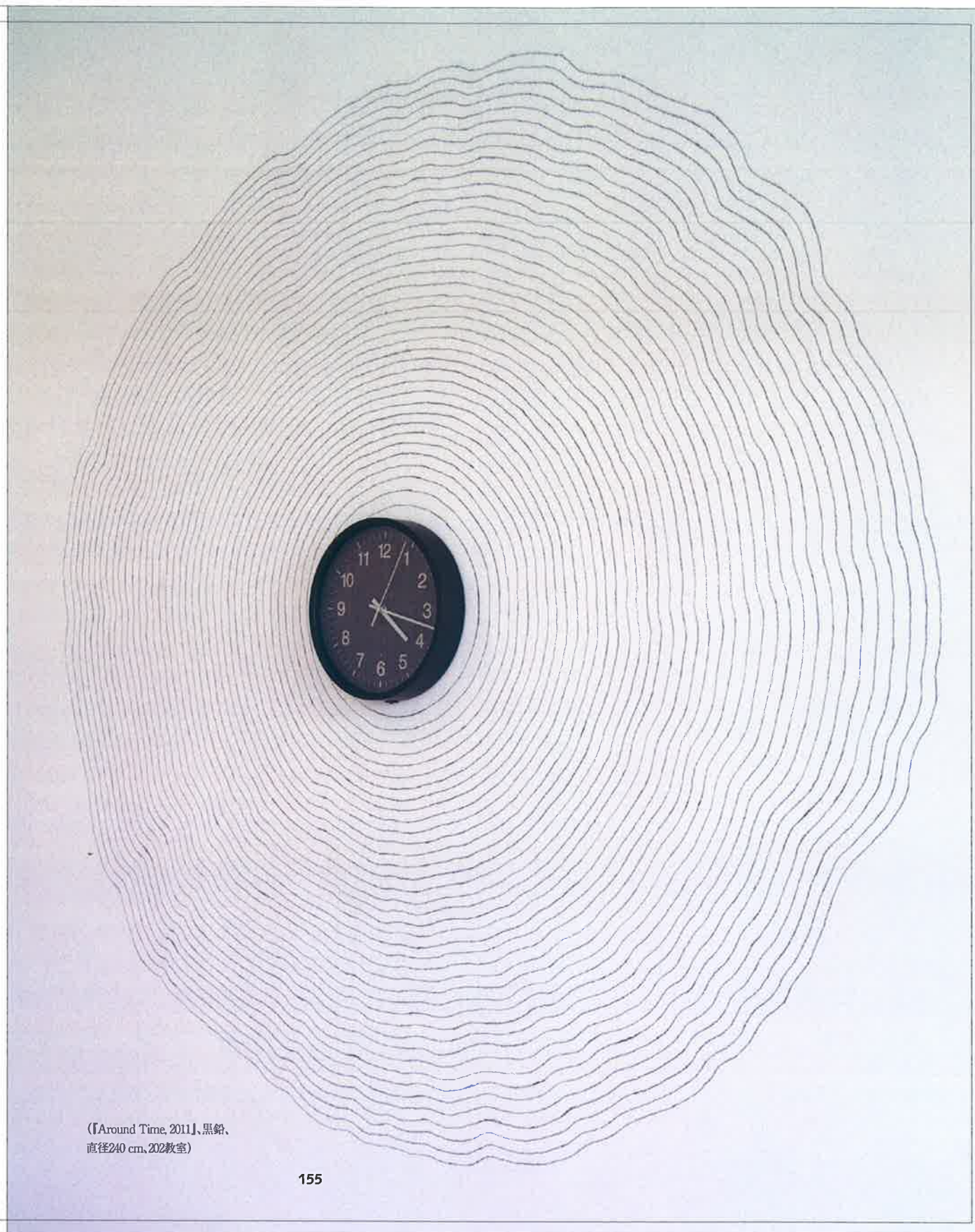
「学校にいたとき、とりわけ小学校のとき、私に興味があったのは、授業が早く終わるように時間が経過するのを見ることだった。作品を手掛けるとき、私はいつも文脈を考慮し、それを作品の中に組み入れようと試みる」

掛け時計のまわりに描かれた円によって、掛け時計に対する注意が促される。

「この掛け時計一つでは、ただ壁に掛けられた物体にすぎない。だが、作品の文脈の中に取り込まれると、単なる掛け時計以上のものになる。私は日常生活のモノを使い、それらのモノの意味を広げることが好きなんだ」そこから彼の〈現実の見方を増強する者〉という役割が生まれたのだ。

J.-L. ヴィルムートにとって、アーティストの役割とは、目に見えないものを見せ、人と世界との関係を変えることだ。

「動物、植物は知性の一形態を表している。どうしてそれを考慮に入れないのだろう？ たとえば植物はそれ自体一つの脳だ。また私は昆虫にもとても興味がある。もし一匹のミツバチを東京のと真ん中で放したら、どんなに遠く離れていても自分の巣を見つけるだろう。ところが人間が東京の真ん中で一人になり、街を知らなければ、途方に暮れてしまう。だから、私たちのものとは別の形の知性があり、それを研究するのは興味深いことだと思う」



《[Around Time, 2011]、黒鉛、
直径240 cm、202教室》



彼が考案し、2011 年 7 月に千葉県柏市に開店したカフェ *Bees* は、全体がミツバチと彼の作品のコンセプトに基づいて作られている。ハチの巣の形をした椅子と肘掛椅子とテーブル、装飾には蜜を集めているミツバチの近接撮影写真、繭の形をしたランプ。やはりハチの巣を再現した板張りのテラスには、全面が金色の葉っぱで覆われた六つの六角立方体の塔が立っている。それぞれの立方体が巣を形成し、その中ではミツバチがテラスに植えられた花から蜜を集めたあと、忙しく立ち働いている。塔の中では、ガラスのチューブが巣の上下を結んでおり、ミツバチのエレベーターとして使われている。

「ミツバチは汚染のせいでどんどん減ってきているが、彼らは受粉において主要な役割を果たしている。アインシュタインは、もしいつかミツバチが消えたら、世界はもう長くないだろうと言った」

2011 年 9 月、ジャン＝リュック・ヴィルムートは、三菱テクノロジーの協力を得て、植物の茎を流れる樹液が立てる音をとらえて、東京表参道のスパイラルで〈植物のコンサート〉を催した。

人と人との関係を〈増幅させること〉もジャン＝リュック・ヴィルムートの関心の一つだ。1997 年のヴァル九条山滞在の際、彼は同じく表参道スパイラルにバー「*Séduire*」を企画した。色とりどりのランプに照らされたバーの薄暗がり、各テーブルに置かれたテレビ画面に映っているのは、愛し合いたいと思う人の前にいると想像してもらった人々を彼が撮影したものだ。客は椅子に座り、〈誘惑のひとつき〉を楽しむ。

このコンセプトはパリのサンジェルマン・デ・プレでも実況で採用された（『*Séduire 2*」、2002 年）。プロの男優あるいは女優が、この目的のためにしつらえた車の中に通りがかりの人を迎え入れ、4 分間、言葉による誘惑のときを過ごすというものだ。その言葉は同時に車の外のデジタル大画面で生中継された。「ここでいくつもの出会いが生まれたよ」と、ジャン＝リュック・ヴィルムートは楽しそうに話す。彼にとってこうした遊び心は現代アートの重要な側面だ。

「一本のヤシの木を取り囲んで螺旋階段を作り、人々が上に登り、木と同じ展望を得られるということを企画したことがある（『ヤシの木を囲んで 1』、1989 年、ニース）。そこで、私は人が普段と違う体験を持つことを提案したんだ。アーティストとは、自問し、異なる視点を与えようと試みる存在だ。われわれはきわめてデカルト的な社会に生きている。アーティストはそうしたもののすべてを少しづらつかせようとする。アートが面白いのはそこなのだ」

横山利夫 *Toshio Yokoyama* 非常に面白い。一瞬、写真のコピーが貼ってあるのかと思った。よく見ると、茶色の絵の具が盛り上がり、描かれたのだとわかる。セピア色のような茶色がいい。ただ他の明るい色だとどうなるのか想像するのも面白い。



portfolio / Aicha Hamu



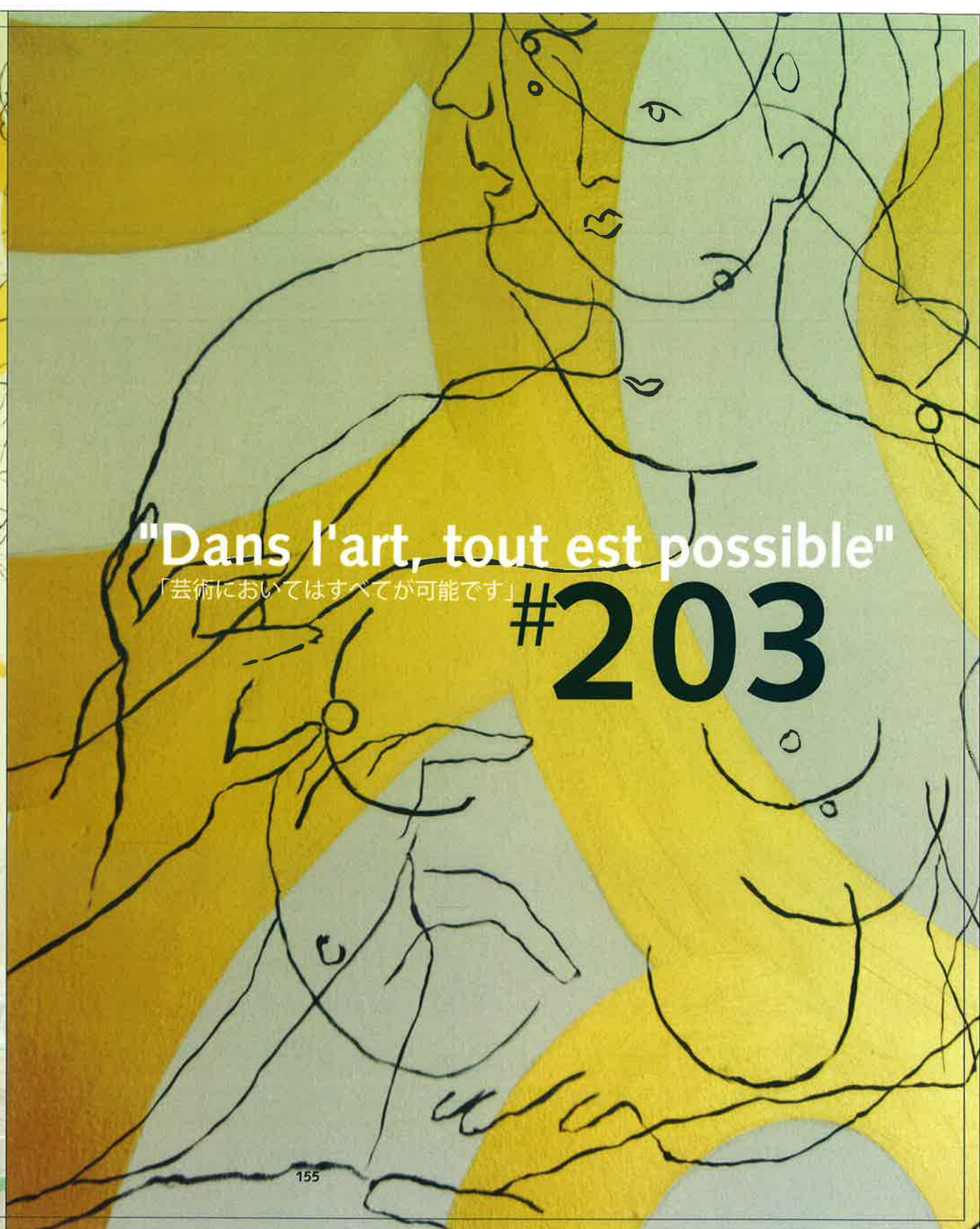
Aicha Hamu«SANS TITRE (BLACKMAIL)»
2009 - Usure sur satin Dimensions variables (environ 250 m2)
Vue de l' exposition En Découdre, Fondation Espace Ecureuil, Toulouse, France, commissariat Alexandra Fau
© A.HAMU Courtesy Galerie Catherine Issert, France

Aicha Hamu«SANS TITRE (BLACKMAIL)»
2009 - Usure sur satin Dimensions variables (environ 250 m2)
Vue de l' exposition En Découdre, Fondation Espace Ecureuil, Toulouse, France, commissariat Alexandra Fau
© A.HAMU Courtesy Galerie Catherine Issert, France

Aicha Hamu«SANS TITRE (BLACKMAIL)»
2009 - Usure sur satin Dimensions variables (environ 250 m2)
Vue de l' exposition En Découdre, Fondation Espace Ecureuil, Toulouse, France, commissariat Alexandra Fau
© A.HAMU Courtesy Galerie Catherine Issert, France



ジャン＝リュック・ヴィルムート
Jean-Luc Vilmoth
(1952年、フランス、クルツワルド)
80年代のニュー・アヴァンギャルド・
スカルプチャーのアーティストに
なっており、
ジャン＝リュック・ヴィルムートは
日常のオブジェから作品を
創り上げるが、そのオブジェの
新たな側面や使い方を
発見させる。彫刻、建築、写真、
パフォーマンスやビデオという
手段を使って、彼は「現実の
見方を増強する者」を
自任している。国際的に
知られる彼は、定期的に
日本で創作、展示を行っている。
<http://www.jlvilmoth.com/>
(フランス語)







206教室のライトベージュに塗り替えられたばかりの南側の壁にグアコルダのエlegantなフレスコ画が描かれている。教室に入るとまず目に飛び込むのは、場面に動きを与える金色の大きな円の渦の下、フォンテーヌブロー派の有名な絵画「ガブリエル・デストレとヴィヤール公爵夫人」だ。

1594年に制作されたこの作品では、二人の女性が、白い布で覆われた浴槽に上半身裸で描かれ、深紅の豪華なカーテンに縁取られている。ガブリエルは左手に指輪を持ち、妹のヴィヤール公爵夫人は彼女の右胸をつまみ、アンリ四世の愛妾ガブリエルの処女を暗示している。部屋の奥では、暖炉のそばに座った一人の女召使いが裁縫に没頭している。

グアコルダのフレスコ画では、二つのモチーフしか採用されていない。胸をつまむ公爵夫人と背景の左側に描かれた女召使い、しかし彼女は二重になり、ロダンの「考える人」のシルエットに変身する。

彼らの頭上に描かれた小さな正方形は、原画で暖炉のそばにかけられた小さな絵を思わせ、角を作る二本の線は暖炉を思わせる。フレスコ画の唯一の直線であるこの小さな正方形と暖炉の角が、この絵に安定感と均衡をもたらしている。前面には官能性も漂う二人の女性の優美なシルエットが波及し合い、重なり合い、動きの印象を強めている。もっと近くからこの絵をしばらく観察していると、全体が振動しはじめ、表情、腕、手、すべての線が活気づき、踊りはじめ、見る者を果てしない渦の中へと連れ去るような印象を抱く。「私がフォンテーヌブロー派の絵から着想を得たのは、フランス美術の代表的ものを使いたかったのと、この絵のテーマがとてもモダンだと思ったから。この作品はまた、レオナルド・ダ・ヴィンチの『モナリザ』、マネの『草上の昼食』、アングルの『トルコ風呂』など、古典作品の再解

釈をめぐる版画シリーズの系列に属しています」

フレスコ画制作のため、グアコルダはまずフランスで制作した腐食銅・アクアチント版画を、オーバーヘッドプロジェクターを使って壁に投射した。次に、レーザーを用いて長方形の線を引き、その内部に金色の大きな円を描く。それから人物の線を描き、そこにもとの版画にはなかった何本かの線を描き足した。それは、「縮尺の変化にともない、いくぶん空間が空いているように見えたから」だと言う。

そして最後に、彼女は水と少しの墨汁とほんのわずかの金色の塗料で作った緑青を入れた。それは彼女の作品の輝きを損なうことなく、言うに言われぬ古色と洗練さを与える。

古典美術への思い入れは、多くの現代アーティストの関心からはかなり遠いものかもしれないが、グアコルダにおいては自然に見える。

「大部分のアーティストは多かれ少なかれ、ほかの作品から着想を得ています。ヴェン・ゴッホはミレーから、ピカソはアフリカの彫刻から、ルイ・カースはピカソから……。芸術は芸術から水を汲み、展開していくのです」

彼女の好きなアーティストは、ピナ・バウシュ、マネ、ミケランジェロ、北斎、ルーベンス、フリーダ・カーロ、ジェームズ・アンソール、ルシアン・フロイド、アンディ・ウォーホル、フランシス・ベーコン。

「なぜなら彼らは共通点としてフィギュール(表情、人物)を描いているからです。彼らは私に着想を吹き込みますが、私は彼らのように描こうとはしません。私はただ人物の輪郭、線だけを再び取り上げます。その線は、厚みも色も違うものになりえます。鮮明だったり、震えていたり、細かったり、太かったりします。重なり合ったり、絡み合ったり、結ばれたり、ほどけたり、雑種の存在を作り上げ、動きと透明性を与えます。それは時間の中の旅であり、過去と現在、想像世界と現実との間を行き来する旅なのです」

グアルコダの線(トレ、輪郭)に対する興味はおそらく、版画家としてスタートした経験から来ている。同じく版画家だった彼女の母親が、彼女の幼少期にこの技術を教えたのだが(グアルコダもまた彼女の10歳と13歳の子供たちに版画の手ほどきしている)、それは彼女が別のアートと技法、とりわけビデオに関心を向けることを妨げない。

彼女の最初の二作品、『エコー』と『エコー2』では、黒い背景に白い線が動き、変化とオーバーラップ(重ね写し)の倦むことない戯れの中で作品が織られ、ほどかれているのを見ることができる。

「アートにはすべてが許されています。アートに仕切りはありません。新たなメディアは接触を加速させます……。私は、こうした新たなメディアのおかげでアーティストと観客の間の相互連結が可能なこの時代が好きです。もちろん、デッサン、版画、絵画などは存在し続けます。これら伝統的な技法は新たな技法と直面し、互いを豊かにし合うのです。でも結局のところ、技法は付随的なもので、重要なのは作品から立ち昇ってくるものだと思います」

今回初めて滞在した日本で、グアルコダは「この国に行き渡っている安全と調和の感覚」に強い印象を受けたという。東京で気に入ったものを聞くと、彼女は混ぜこぜに次のものを挙げた。「スタンプ、鈴、折り紙、変装する若者たち、制服、礼儀正しさ、和紙、文字、ゆかた、上品さ……」。

アーティストの中では「機械的に作らず、空を天井に、水玉で覆われた洋服に体を包む草間彌生。彼女は毎回、色、大きさ、雰囲気、材料、照明に変化をつけて、空間に水玉を配列する方法を考案します。それからカイカイキキと村上隆は、イラストやマンガにかなり近い、子供っぽく、新鮮で、カラフルで、楽天的な側面で私を驚かせました」

グアルコダは再び日本を訪れ、日本のアーティストや職人たち、とりわけ紙の製造者と接触したいと願っている。

白根裕美子 Yumiko Shirane 古典を主題にしながら、2人の女性の動きを予感させ、さまざまに解釈できるミステリアスな作品である。シンプルな線で人物を描き、ところどころに金色の雲のようなモチーフを配している。これが日本画をイメージさせる。



(『二重の婦人』、アクリルと墨のフレスコ画、170 cm × 230 cm、203教室)

山本三津江 Mitsue Yamamoto ドアを開けて目に飛び込んできたのは金の環、環。環。近づいてよく見ると、その下に繊細な黒い線で女性の上半身が描かれている。中央左下で頬杖をついている男性はロダンの「考える人」か。大勢の女性に囲まれて一体何を考えているのだろう。



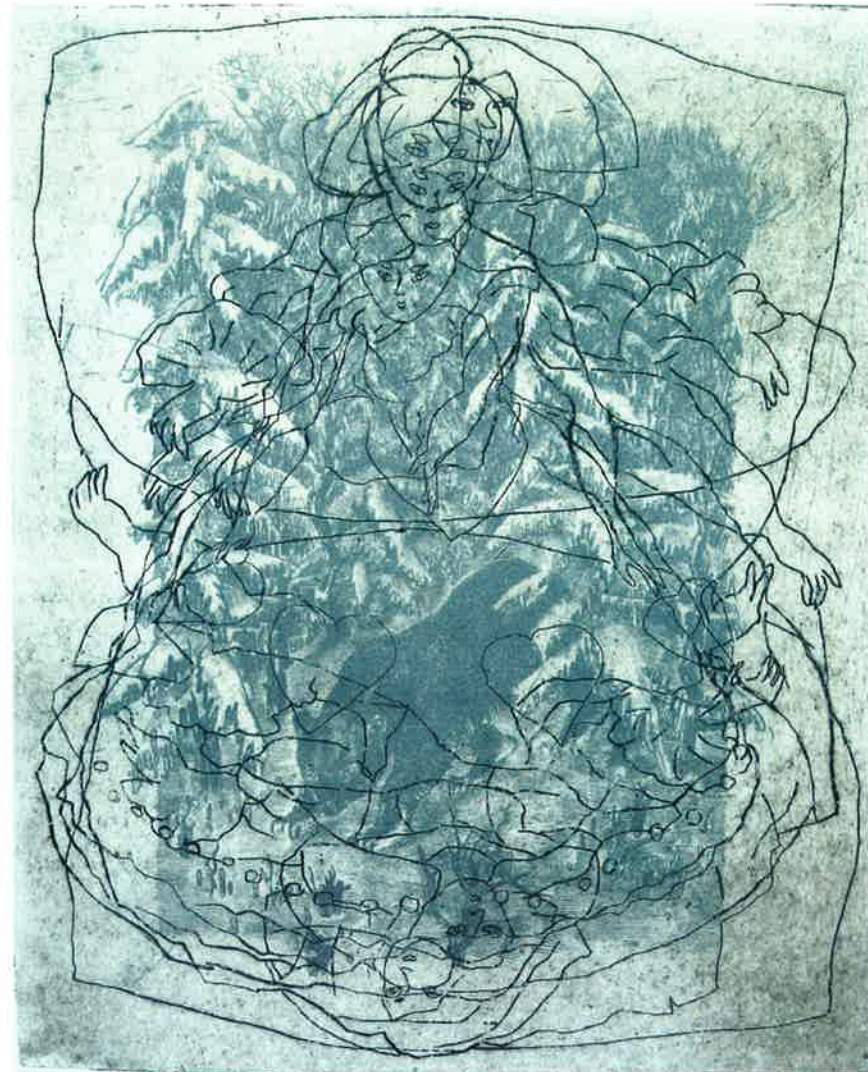


Aïcha Hamu«SANS TITRE (BLACKMAIL)»
2009 - Usure sur satin Dimensions variables (environ 250 m2)
Vue de l' exposition En Découdre, Fondation Espace Ecureuil,
Toulouse, France, commissariat Alexandra Fau
© A.HAMU Courtesy Galerie Catherine Issert, France

**Lucie Albon «Sans colle. Faire une Reunion
de ready mades».**
Note projects.2001-2008
candre Pompidou,Musee national d' art moderne,paris

Aïcha Hamu«SANS TITRE (BLACKMAIL)»
2009 - Usure sur satin Dimensions variables (environ 250 m2)
Vue de l' exposition En Découdre, Fondation Espace Ecureuil,
Toulouse, France, commissariat Alexandra Fau
© A.HAMU Courtesy Galerie Catherine Issert, France

**Lucie Albon «Sans colle. Faire une Reunion
de ready mades».**
Note projects.2001-2008
candre Pompidou,Musee national d' art moderne,paris



グアコルダ
(1967年、チリ、
コンセプション生まれ。
両親はフランス人)
パリ在住の画家、アーティスト。
彼女の絵画、版画、ビデオなどの
作品は「過去の作品と現在の
イメージから着想を得て」
制作されている。過去と現在の
世界の重なりから、新たな
意味と解釈が生まれる。
グアコルダは1991年に
パリ美術学校を卒業、
1993年にパリ第7大学で
造形美術の学位取得。パリ、
フランスの地方都市、スペイン、
イタリア等で作品が展示された。
<http://www.guacolda.com>
(フランス語)



日

学院に招かれた16人のフランス人アーティストの中で、RCF1は、プスコーズとともに、唯一のグラフィティ画家だ。だが、プスコーズとは対照的に、204教室の作品に日本的要素は一つもない。

「僕は日本的なものを作りて日本に来たわけじゃない。ローリング・ストーンに「Satisfaction」をフランス語で歌ってくれとは頼まないだろう」

スプレーで描かれた彼の抽象的なフレスコ画は、RCF1が生まれ、今日なお暮らすパリ郊外の電車や壁に描かれたのと同じように、黒い曲線で引き立たされた原色の大きな染みで構成されている。

全体図は、ドアも含め、教室の空いている壁全域を覆っている。RCF1は空間全体を占有するという感覚を味わうのが好きだ。黒マーカーを使って204教室の仕事に取りかかる前に、彼は巻き上げボードを覆うことから始めた。彼のサインを図案化した巨大なタグ(落書き画家が名前の代わりに描くシンボル)だ。

「うまいタグはグラフィティのすべてを含んでいる。タグは非常に重要なんだ。それはサイン以上のものであり、事物の根源そのものだ。フレスコ画には数々のテクニック、ノウハウの実演が見られるが、僕からすればそれはうんざりするほど見苦しい。でもグラフィティは面白い。その中には絶望もある。最終的に意味がないから」

彼の世代のグラフィティ画家の大半がそうであるように、RCF1も独学で学んできた。「子供のころからデッサンに興味があった。BDを書き写して、顔や、顔の表情などがどう機能しているのか理解しようとした。僕は造形美術のバカロレアを持っているし、美術史の教育も受けたが、すぐに大学はやめた。80、90年代のアカデミズムが完全に定着していたからね。ある人は親切にもこう説明してくれたよ。広告代理店で絵の描ける人間はたくさんい

るが、アーティストになるにはそれでは十分ではないと。だが僕には、ポン・ヌフ橋を包装したり、円柱に縞模様をつけたり、なんてことにはまったく興味がなかった」

彼が崇敬するのは、フランス・ベルギーのBD(『タンタン』、『Métal hurlant』、そしてクリア・ライン技法のチャンピオン、イヴ・シャラン)はもちろんのこと、アメリカのイラストレーター、ノーマン・ロックウェル、ジャック・カービーから、コミックやスーパーヒーローを通して、アンダーグラウンドのBD作家ロバート・クラムまで幅広い。というのも、RCF1にとって、BDとはまずアメリカのものであり、70年代はじめにニューヨークの地下鉄で生まれたグラフィティも同じだ。

RCF1は80年代の終わりにグラフィティ画家／タグ画家としての仕事を開始した。「最初はいつもマーカーを持ち歩き、ポスターに口ひげを描いたり、ばかな言葉や好きなグループの名前を書いたりしていた。なぜなら壁に描くべきことをほかに知らなかったから。その後、グラフィティを見て興味を持ち、RCF1という名前を作って、パリの壁を覆ったんだ。80年代のパリは面白く、ものすごく活気があった。今は死んでるけどね。寛容さはゼロ、すべてが掃除し尽くされている」

やがてグラフィティはパリの壁や電車から離れ、アートのための空間に居場所を見つけることとなる。だが、RCF1はアウトロー時代を懐かしんでいる。

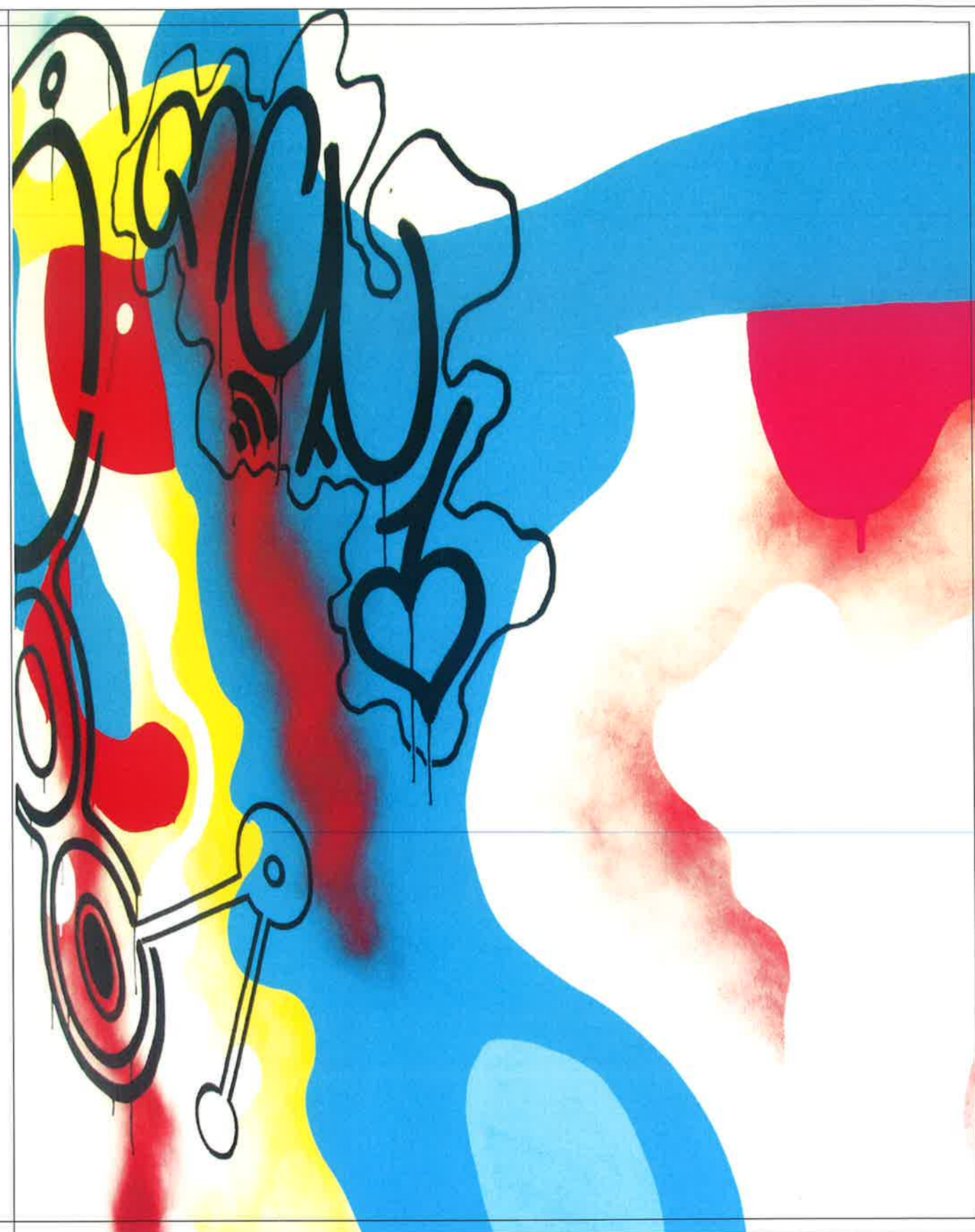
「以前、グラフィティ画家は超エリート集団だった。僕らが電車に絵を描いたのは、ほかのグラフィティ仲間に、〈おい、おれが今月何台の電車に描いたか見たか?で、お前は?〉と言うためだった。それはまったくの遊びだった。僕らはお互いにコピーし合った。そこにはさまざまな傾向、方法、スタイルがあった。電車に絵を描くには夜、鉄道倉庫に出かけて、監視や特別警察に捕まらないようにうまい逃げ方を探さなければならなかった。とにかくすばやく

逃げなければならなかった。今? 今も存在してはいるが、ずっとむずかしいし、とても高くつく恐れがある。一方で、ものすごく組織化され、競争力のあるグラフィティ画家たちもいる。半ば飲んだくれて、力づくでやっている者たちもいる。目印を付けても何にもならないが、それでも目印を付けることはできるということを示すためにね」

RCF1はもう何年も電車には描いていないと告白する。最後に描いたときに裁判沙汰になり、5万ユーロの罰金を科されたのだ。支払いはまだ済んでいない。

技術面においても、「グラフィティはビジネスになってしまった。今日ではすべての大都市に、スプレーとさまざまな線を引くためのエアブラシを売る専門店まである。僕の世代のグラフィティ画家は、自動車用工業塗装スプレーを使い、エアブラシは特定の効果を出すためにカッターを使って自作したものだ。例えば、太い線を引くためには、Décap'four(オープン用の油取りのスプレーが必要で、スーパーに盗みに行くんだ。その道具は、ホワイトスピリット(ペイントの希釈剤)に入れて大事に保管したものだ。前は、スプレーといえば扱いの難しい工業道具で、それというのも、初めて試してみると、大量に流れ出てベタに失敗するからだ。スプレーでうまく描くには、何度も試してみるしかなかった。それは自分だけが発明した秘密のやり方だった。今日ではそうしたものがすべて、店で安く売られている」

同様に、地下雑誌『les franzines』(創刊年不明)は不正にコピーされて売られているが、より画一化したものとなっている。エリート主義・排他的アートであったグラフィティは今日、雑誌、出版物、そしてとりわけインターネットを通じて広く拡散している。それは悪いことだろうか? 「いや。だがそこには階級が欠けていて、面白さがない。以前は普及の手段がないという事実が魔法のような効果を与えていた。今やこのアートはあまりに身近なものとなり、違反的な価値が失われてしまった」



Aïcha Hamu «SANS TITRE (BLACKMAIL)»
 2009 - Usure sur satin Dimensions variables
 (environ 250 m2) Vue de l' exposition En Découdre,
 Fondation Espace Ecureuil, Toulouse, France,
 © A.HAMU Courtesy Galerie Catherine Issert, France



一見して彼の作品に日本的なるものを見つけることはできないが、実はパリの道場で10年間習ってきた合気道(小林流)を通して、日本はRCF1の精神に刻印を残している。合気道は彼に何をもたらしたかと尋ねると、長い熟考の末、彼はこう答えた。

「少しだけ多くの意識。以前は自分が作っているものについて意識的ではなかった。意識的になると、的確になる。絵画でも、僕は的確な所作というのが好きだ。やり直さないし、描いたものを修正もしない。デッサンでも絵でも、取るべき所作というのがあり、僕はそれを実行する。それで失敗したらそれまでだ」

使い色についても、RCF1は日本の影響、思想を剥ぎ取った形態という影響を受けているという。

「僕は20年間黒を使うことを拒んできた。黒は絵に使い色ではなく、デッサンに使うものだから。3年前、大きなフレスコ=ポスターを制作する機会があった。それは紙だったから、絵の具では描きたくなかった。それで、ほんの少しだけ色を使って、黒の大きなデッサンを描いたんだ。それで黒がうまく機能することに気付き、それから絵画でも黒を取り入れるようになった。その代わり、パレットは基本色だけに制限した。補色を使わないでコントラストに成功するために、いくつかの制約が出てくる。頭を絞らなければならない、…あるいは心を」



羽田幸恵 Yukie Haneda 作品からは活力と生命力が伝わってきます。重い印象はなく、飛び跳ねるようで陽気な作品です。

portfolio / RCF1



RCF1
(1968年、フランス、ピストー生まれ)
名前のRCF1は、ザ・クラッシュの歌
《Rudie Can't Fail》の頭文字。
パリ郊外に生まれ、ロック少年、
BD少年だったRCF1が、
闇の場所や、より文明化した場所に
スプレーで絵を描きはじめて
20年以上になる。
彼は定期的にパリや外国(イギリス、
ドイツ、スイス、最近ではインドネシア、
アルゼンチン、オランダ、日本)で
作品を展示している。
<http://www.romeocharliefoxtrot.blogspot.com/>
(英語)



¹ Aicha Hamu «SANS TITRE (BLACKMAIL)»
2009 - Usure sur satin Dimensions variables
(environ 250 m2) Vue de l' exposition En Découdre,
Fondation Espace Ecureuil, Toulouse, France,
© A.HAMU Courtesy Galerie Catherine Issert, France

¹ Lucie Albon «Sans colle. Faire une Reunion
de ready mades». Note projets. 2001-2008
centre Pompidou, Musée national d' art moderne, paris

¹ Lucie Albon «Sans colle. Faire une Reunion
de ready mades». Note projets. 2001-2008
centre Pompidou, Musée national d' art moderne, paris

¹ Lucie Albon «Sans colle. Faire une Reunion
de ready mades». Note projets. 2001-2008
centre Pompidou, Musée national d' art moderne, paris

⁵ Aicha Hamu «SANS TITRE (BLACKMAIL)»
2009 - Usure sur satin Dimensions variables
(environ 250 m2) Vue de l' exposition En Découdre,
Fondation Espace Ecureuil, Toulouse, France,
© A.HAMU Courtesy Galerie Catherine Issert, France

⁶ Lucie Albon «Sans colle. Faire une Reunion
de ready mades». Note projets. 2001-2008
centre Pompidou, Musée national d' art moderne, paris

^{7,8,9} Aicha Hamu «SANS TITRE (BLACKMAIL)»
2009 - Usure sur satin Dimensions variables
(environ 250 m2) Vue de l' exposition En Découdre,
Fondation Espace Ecureuil, Toulouse, France,
© A.HAMU Courtesy Galerie Catherine Issert, France



Jacques Floret

ジャック・フロレ

"Tout le monde

a subi l'influence de l'art japonais"

「誰もが日本美術の影響を受けている」

#205

papillon



ベ

ジャック・フロレのフレスコ画は、教卓の反対側の壁に広がっている。ちょうど教室で繰り広げられている場面を反映している鏡のようだ。前面には、こちらに七分方背を向けて、黒と白の服を着たエレガントな女性教師が描かれている。彼女は大半が男性の生徒たちに、一度では覚えられないモリエールの言語の初歩を教えている様子だ。ところが、フランス語教科書の代わりに、教師が手にしているのは、蝶のイラスト！ その絵は、教室の、どちらかというとモノクロの世界に色彩と生命力に溢れるタッチを与えている。その奥では、女子学生が「蝶々！」と叫ぶ。

「僕はただ、教室にいる日本人の女子学生たちを想像しただけだ」と彼は説明する。日仏学院は彼に教室の授業風景を作品にするよう依頼し、そのための写真を提供した。

「それから、この同じ学生たちがいつかパリを訪れるところを想像した。一つの単語がつきまとうように記憶に戻ってくる。朝ラジオで聞き、ハミングせずにはいられない旋律のように。彼女たちが



が日仏学院でフランス語を学んでいたとき、毎日見ていた単語。しかし実用的には大して役に立たない単語。ただ口にするのが魅惑的な単語。軽いアジア的なアクセントとともに発音されるのを聴いてみたい単語。僕は〈バビヨン（蝶々）〉を日本で最も知られるフランス語にしたいと思ったんだ」

ジャック・フロレのフレスコ画は、今回のプロジェクトで学習風景を描いた唯一

の作品だ。制作には、彼の妻の協力を得て一週間以上かかった。モデルとなる写真を選んだあと、ジャックは要素を1、2点変更して転写した。

「妻が大部分のベタ（単色の塗りつぶし）をやってくれた。彼女はとても綿密なんだ。ちょうど学院が閉館している夏に制作した。僕らは建物の中で二人きりで、この所有者になったような、これが僕らの城みたいで、なんだかいい気分だったな。この上ない自由の中で制作できたからね。仕事が終わると、東京見物。ペコちゃんと彼女のシュークリームに魅了されたよ。妻は街中でイラストレーター、花クマユサク関連の商品を探したが、残念ながら収穫はなかった。それから京都にも数日滞在した。有名な寺を二か所と、動物園を見物した。象とオランウータンたちはとりわけ滅入っているように見えた」

ジャックは何もメッセージを伝えることは望まないと言う。

「私が絵を描くのは、まさにメッセージを伝えるのを避けるため。僕は〈少しぼやけていること〉が好きなんだ」

彼はどんな影響も認めない。もちろん、日本の影響も。

「日本美術の影響は誰もが受けていると思う。フランスでは印象派、ナビ派の影響を受けているようにね。だから本当のところは僕も例外ではない。たしかに、自分の書棚を見ると、日本人作者のものがかなりある。古典だけでなく、『ガロ』や『アックス』のような雑誌出身の漫画家までね。僕が好きなのは、母親の首にタイヤを巻いて写真を撮る折元立身や、足で絵を描く白髪一雄。ゲロゲリゲゲのレコードも好きだ。でも現代日本アート一般について特に意見はないな。何人かの日本人アーティストが好きだけど、それはベルギーやイタリアの何人かのアーティストを好きなと同じことだし」

ジャックはいかなる流派も、傾向も師匠も持ち出さない。

「その種の質問に答えるには僕はもっともふざけたくない人物だ。もしあなたが僕の母に尋ねたら、彼女はおそらく、私がフランスで一番のイラストレーターだと答えるだろう」

ジャック・フロレは捉えがたい。フランス的なユーモアで、ひらひら飛ぶ蝶のように身をかわす。



柿原圭介 Keisuke Kakihara この作品では、普通の教室の一風景が描かれていますが、教室の中に同じ教室が描かれており、まるで壁が鏡になっているようで、実は別の世界を描いているというパラドックスが不思議な感覚にさせます。



ジャック・フロレ
(1975年、フランス、
シャンペリー生まれ)
イラストレーターとして『ル・モンド』
『マガジン・リテール』『テクニカート』
『インロックティブル』等の
雑誌で活躍。
明るいつラインの調和のとれた
作品は、どこか浮世絵を思わせ、
(ブラック)ユーモアと官能性との間を
揺れ動く。また独立レコード会社
ブラスタック、ハーツフェルド、
ビフ・バフ・レコードのポスターや
アルバムジャケットのデザインも
手掛けている。出版物に、
Alf-moi partout
(Editions du Jour agnès b),
Permettez-moi d'admirer
votre parc (Orbe),
RACHEL & ROSCO
(Dilecta), Oh ! le bel été,
Mammaire, MAMAN
(Editions Derrière la
Salle de Bains),
Laura (Editions P)。

<http://www.lezilus.fr/artistes/14/jacques-floret.html>
(フランス語)

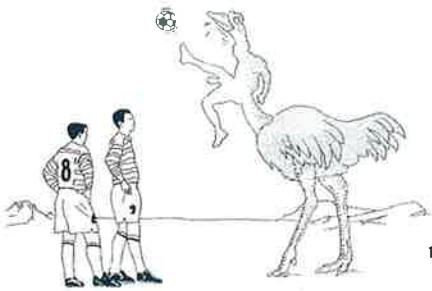


(無題、アクリルプレスキット、205 cm × 300 cm、205教室)

portfolio / Aicha Hamu



154



¹ Aicha Hamu «SANS TITRE (BLACKMAIL)»
2009 - Usure sur satin Dimensions variables (environ 250 m2)
Vue de l' exposition En Découdre, Fondation Espace Ecureuil,
Toulouse, France, commissariat Alexandra Fau
© A.HAMU Courtesy Galerie Catherine Issert, France

¹ Aicha Hamu «SANS TITRE (BLACKMAIL)»
2009 - Usure sur satin Dimensions variables (environ 250 m2)
Vue de l' exposition En Découdre, Fondation Espace Ecureuil,
Toulouse, France, commissariat Alexandra Fau
© A.HAMU Courtesy Galerie Catherine Issert, France

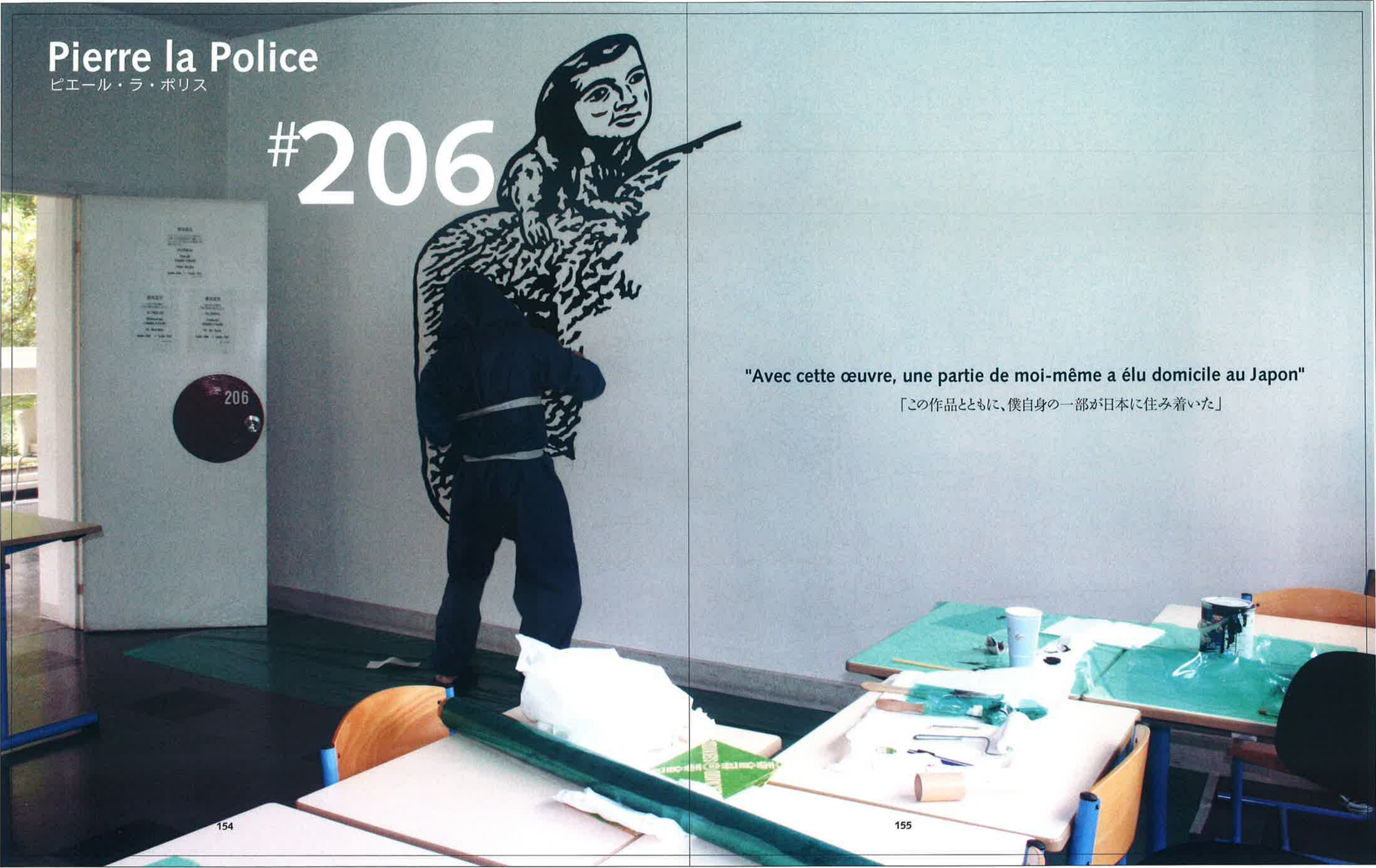
¹ Lucie Albon «Sans colle. Faire une Reunion
de ready mades». Note projets. 2001-2008
cantine Pompidou, Musée national d' art moderne, Paris

¹ Lucie Albon «Sans colle. Faire une Reunion
de ready mades». Note projets. 2001-2008
cantine Pompidou, Musée national d' art moderne, Paris

¹ Lucie Albon «Sans colle. Faire une Reunion
de ready mades». Note projets. 2001-2008
cantine Pompidou, Musée national d' art moderne, Paris



155





自宅から1万キロも離れた東京の、危険はなにもない日仏学院の中にも、ピエール・ラ・ポリスは変装して仕事をする。全身黒ずくめ、黒の覆面をかぶって。彼は太く正確でエネルギッシュな線で、半分猿、半分人間の巨大な生き物と、その背に乗る子供の姿を描く。彼らは学院の生徒たちと毎日をともに過ごすことになるのだ。この雑種の生き物は四つんばいで歩き、体はゴリラのように毛むくじゃらだが、顔は人間で、かなりの人生経験を積んだ思慮深い表情をしている。その切れ長の大きな目は、われわれにこう問いかけているようだ。「いつおれは解放され、本当のおれになれるんだ？」その背中で、赤ちゃんゴリラの、どこか女性らしい顔は疑わしげだ。



「僕のアイデアは、教育の概念、知識の伝達という概念を喚起するような絵を描くことだった。かといってそれが一目でわかったり、教訓的すぎることはないように。そして、生徒たちが僕の作品のすぐそばで時間を過ごすことになるので、同伴するペットのようなものにしたかった。この動物を目にして、快い、甘ったるくなくカワイイ、でも飽きさせないためにある種の奇妙さも同時に漂うようなものにしたかった」

ピエール・ラ・ポリスは、この作品のために作った写真のコラージュからデッサンを描いた。東京に到着した彼は、オーバーヘッドプロジェクターを使ってデッサンを壁に再現した。この作業に3日かかった。

「白黒にしたのは、それすることで僕のアイデアがうまく再現できると思ったからだ。また、色付けしても何も付け足すことにはならない、たぶん全体的により装飾的になり、おそらく象徴性を弱めることになると思った」

ピエールが気に入ったのは、「フレスコ画が持続的にこの場所にとどまるということ」だった。「それは、僕自身の一部が日本に住み着いたよりで、その考えが気に入ったんだ」

彼が日本文化と最初に出会ったのは幼少期のことだ。「SF小説と空想映画に熱中して、機会があるごとに、僕は日本の怪獣映画を見に行き、巨大で破壊的な雰囲気にとても強い印象を受けた」

若い世代の同業仲間たちと違って、彼がマンガを発見したのはもっと後のことだ。日本人アーティストの作品——古いものも新しいものも——についても同じだった。

「彼らの作品から漂ってくるものが印象的だ。彼らのインスピレーションは、フランス人アーティストのものとは非常に異なっているように思う。彼らが世界に向ける視線についても同じだ。僕を魅惑するもう一つ別の要素は、日本ではアートが日々の生活のいたるところ、日常の小さなものにおいても表現されているということだ」

彼が初めて来日の機会を持ったのは、2004年、アニエス・Bの招待を受け、東京で展覧会を行うためだった。彼はこの機会を利用してしばらく滞在し、この国と文化に親しんだ。「この初めての滞在で僕に理解したのは、日本のグラフィックの風景と、僕が自分の芸術表現方法の枠内で発展させてきた風景との間にはいくつもの類似があるということだった。僕はすぐに親近感を覚えた。同じように、日本人は僕のデッサンを説明なしに理解することに気付いた。彼らは非常に発達したグラフィック教育を受けている。増殖するヴィジュアル環境に常にさらされているため、彼らは画像を読み、解釈することができるのだ」

2年後、ヴィラ九条山に7カ月の滞在し、彼はさらに日本の生活に浸透し、いくつものアートプロジェクトを展開することができた。2009年の間に、彼は二度日本に戻ってきた。一度目は、京都国際マンガミュージアムと京都のSuper Window Projectギャラリーで同時に催さ

れた展覧会に作品を展示するため。二度目は日仏学院の招待を受けて。

フランスでピエール・ラ・ポリスはしばしば、挑発、異議、ユーモアを選んだアンダーグラウンドのアーティストとして紹介される。だが、彼はこのイメージを自分のものとは認めていない。

「僕の作品には、ときに批判的な側面もあるけれど、僕の意図は決してショックを与えたり、社会に対して尊大な視線を向けたりすることじゃない。それよりも僕はナイーブな態度で、自分のテーマに夢中になり、出来上がった作品もそれを創った僕自身も批判的に笑うほうがいい。アンダーグラウンドと一般大衆の間の壁はおそらく集団的認識の事柄でしかない。三次元で描かれた立方体のように、人はそれを凹面としても凸面としても見ることができる。アーティストがこうした扱いを受ける例には事欠かない。生前にはその作品が怪しげとみなされながら、今日古典と認められているものは数多くあるのだから」

こうしている間も、あの雑種の生き物は、その視線でわれわれに問いかけ続ける。「いつおれは解放され、本当のおれになれるんだ？」それは生き物の視線？ それともピエールの視線なのか？



(無題、アクリルフレスコ画、220 cm × 320 cm、206教室)

柿原圭介 Keisuke Kakihara この作品では、普通の教室の一風景が描かれています。が、教室の中に同じ教室が描かれており、まるで壁が鏡になっているようで、実は別の世界を描いているというパラドックスが不思議な感覚にさせます。



154



1 Aicha Hamu «SANS TITRE (BLACKMAIL)»
2009 - Usure sur satin Dimensions variables
(environ 250 m2) Vue de l' exposition En Découdre,
Fondation Espace Ecureuil, Toulouse, France,
commissariat Alexandra Fau © A.HAMU Courtesy
Galerie Catherine Issert, France

1 Lucie Albon «Sans colle. Faire une Reunion
de ready mades». Note projets. 2001-2008
centre Pompidou, Musée national moderne, paris

1 Aicha Hamu «SANS TITRE (BLACKMAIL)»
2009 - Usure sur satin Dimensions variables
(environ 250 m2) Vue de l' exposition En Découdre,
Fondation Espace Ecureuil, Toulouse, France,
commissariat Alexandra Fau © A.HAMU Courtesy
Galerie Catherine Issert, France

1 Lucie Albon «Sans colle. Faire une Reunion
de ready mades». Note projets. 2001-2008
centre Pompidou, Musée national moderne, paris

1 Aicha Hamu «SANS TITRE (BLACKMAIL)»
2009 - Usure sur satin Dimensions variables
(environ 250 m2) Vue de l' exposition En Découdre,
Fondation Espace Ecureuil, Toulouse, France,
commissariat Alexandra Fau © A.HAMU Courtesy
Galerie Catherine Issert, France

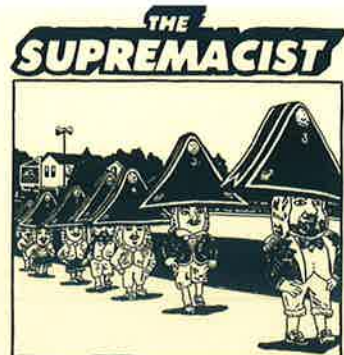
1 Lucie Albon «Sans colle. Faire une Reunion
de ready mades». Note projets. 2001-2008
centre Pompidou, Musée national moderne, paris

1 Aicha Hamu «SANS TITRE (BLACKMAIL)»
2009 - Usure sur satin Dimensions variables
(environ 250 m2) Vue de l' exposition En Découdre,
Fondation Espace Ecureuil, Toulouse, France,
commissariat Alexandra Fau © A.HAMU Courtesy
Galerie Catherine Issert, France

1 Lucie Albon «Sans colle. Faire une Reunion
de ready mades». Note projets. 2001-2008
centre Pompidou, Musée national moderne, paris



155



ビエール・ラ・ポリス
Pierre la Police
(生年、出生地不詳)
その人物像は謎だ。
だが、Libération、
Les Inrockuptibles、
So Foot、QGといった
新聞や雑誌に掲載された
カラフルで辛辣で破壊的な
彼のデッサンは
よく知られている。
ビエール・ラ・ポリスはBD作家
(しばしば限定シリーズとして
アンダーグラウンド出版される)、
ビデオ作家(短編映画
『命の言葉』、
アニメ『ミニバン・マン、遭難した
宇宙飛行士』など)としても
活躍している。
大の親日家でもある。
<http://www.pierrelapolice.com>
(英語、フランス語)

Marie Drouet

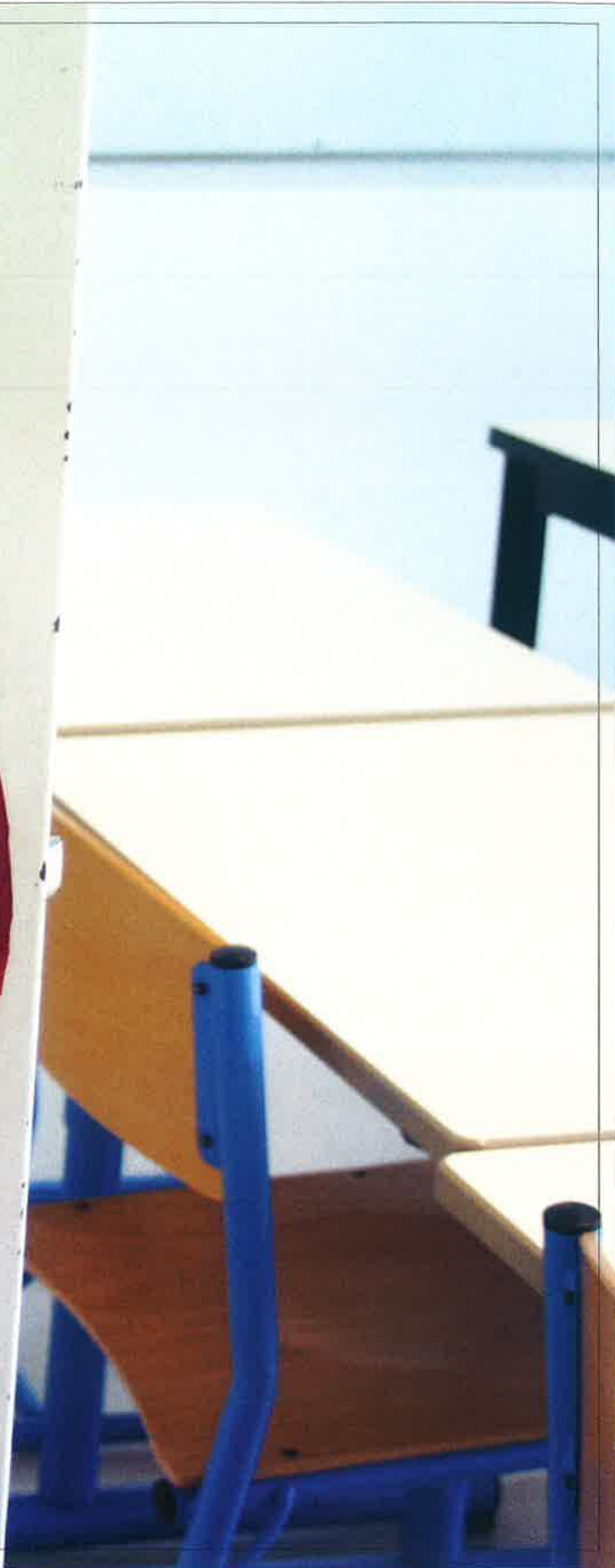
マリー・ドゥルエ

Un état de bien-être né
d'un engagement
physique excessif

過度の肉体的苦痛が
創造の喜びをもたらした

#302

302



(『渦巻く毛髪』、墨絵、直径150 cm、302教室)



Marie Drouet, 2010

154

155

すべては 302 教室の入り口右手の角に、ペン先で描かれた白い小さな円からはじまった。上から見た「旋毛」を表しているとみなされるこの地点（ノートに向かう生徒の頭?）から、マリー・ドゥルエは辛抱強く、髪の毛の黒い線を一本一本、輝くうねりをつけてインクで描いていく。

「円形のモチーフは直径 1m50cm しかありません。なぜなら天井までの高さがそれだけしかないから。このつつましい直径は、髪の毛が広がり、教室全体に波打ち、空間を覆うかもしれないということを示唆するのに十分な大きさです」

気に入った部屋を選ぶことができて満足している、とマリーは言う。この教室には 120 度を開いたこの角度があり、それが「一つの幻覚、突如壁から出現してきたかのような球体というアイデア」を彼女に生み出させたからだ。「この形は視覚的な不安定性を生み、見る者はそれを体験することになります。縦に移動すると、髪の毛が動いているという感覚に襲われます。なぜなら、波打つ黒い線が視覚的に揺らいでいるという印象を与えるからです」

制作作業は、画家でありデッサン画家である彼女にとって、長く困難なものだった。平面でない場所に垂直に絵を描くのはこれが初めてだった。

「ペンを使って線を描くのはまるで彫刻を造っているようでした。細いペン先はときに壁に食い込んだり、軌道から外れたり。反復し加速する動きのために私の腕は腱鞘炎になり、そんな状態で作業をしなければなりませんでした！ でもしばらくすると、動きの反復は一種のトランス状態に似てきて、体は従順に精神に従う。それほど集中していたのです。皮肉なことに、この過度の肉体的苦痛が、ついには幸福な状態をもたらすことに気づきました。もちろん、創造する喜びです!」

ジャン＝リュック・ヴィルムート(202 教室)と同じ創作儀礼、同じ反復への偏執、そして同じ日本への愛着……、しかしこの二人のアーティストの共通点はここまでだ。

マリー・ドゥルエは 1986 年、レンヌ大学で造形美術を学び、「西洋における日本の服飾と身体」と題する研究論文を書きながら日本を発見した。彼女は、山本耀司の服飾が服と身体の間に空間を残し、身体を解放する方法に魅了された。だが、アジアからの直接の影響を受けるのはもっと後。2000 年から彼女のデッサンが植物と抽象的モチーフのほうに向かうようになってからのことだった。

「私はまず垂直型の小さな風景を、次に水平型のものを、1m20cm の台紙に描きました。ある日、作品を歩きながら見ると無限の感覚を与えることに気づきました。そこで私はもっと大きなフォーマットを使い始めま、ついにはフランスの小売店で見つけた最大判型 10m の巻物を使うよう

になりました。それはちょうどアジアの絵巻物を思わせるものでした」

長いこうした巻物の上に、さまざまな風景が次々とインクで描かれていった。水や山の流れが中国風に単色で抽象的に描かれ、でもそこには人間の体や毛髪も見えるような気がする……。なぜならマリーにとって、風景と髪とは結局一つのものでしかないからだ。

「よく見ると、毛髪もまた無限に混じり合い、絡み合う、その明るく暗い毛筋のうねりによって風景を想起させます。見る人はおそらく丘や谷の曲がりくねったラインを想像することでしょう」

マリーが髪に魅了されたのは幼少期のことだ。

「私は髪を長く伸ばしていて、母が毎日髪をとかし、編んでくれました。両親は私の髪が肩の上で束ねられていないのを許さず、しかも髪を切ることも許ませんでした。13 歳のある日、私はこのことに刃向う決心をし、こっそり髪を切りに行ったのです。この決心は重大で、実行するのは困難でしたが、この日を境に私は家族から解放されたのです」

マリーはまたマグダラのマリアの図像にも関心を持っている。

「彼女は、その神話的な髪と、女性の自由を強調するような豪華な装いでキリストの心を引きました。彼女の長い髪は、彼女が悔悛するとき彼女の衣にすなりします。その謎めいた人物像に、私にはとても興味を覚えます」

2009 年、「教室の中のアート」プロジェクトの一環で、マリーが初めて日本を訪れたとき、彼女はただちに日本という場、日本の生活様式に共感した。

「地面に近いところでの生活、室内の簡素な様式、料理の繊細な盛り付けとその巧みな味付け。一方で、人々の慎み、礼儀正しさ、親切さ、他人への気配り……。これらは私には言い古されたものとは思えませんでした。こうしたものの中に、私は生活の非常に洗練された様式を見た思いがしました」

以来、日本との新たな企画のいくつかが実現した。とくに写真家、港千尋とともに制作した風景の作品は 2011 年にナントで展示された。また、2009 年には彼女が感じ取った日本の風景が映像に収められた。

マリーは東京に数カ月滞在したいとも願っている。

「あちこち歩きながら、自由に新しい作品のアイデアを考えたい。けれど、大震災とその影響に

羽田幸恵 Yukie Haneda 部屋の一画に、大きな黒い毛の玉が描かれています。生き物が丸まっているよう見えます。中心には覗き込みたくなるような白い小さい丸があります。解説を読んで少々驚きました。人間の頭を、つむじを中心にして描いたということです。物の一部を大きく描くと別のものに見えるということを実体験できる部屋です。私には、酒造さんが新酒を仕込んだ時につるす杉玉にも見えました。



マリー・ドゥルエ Marie Drouet. (生年不詳、ナント近郊生まれ) ナントに拠点を置くマリー・ドゥルエは、墨、あるいはアクリル塗料を使い、単色の風景と頭髪を描く。この二つのテーマは相互に浸透し合う。というのも彼女の風景——とりわけアルシュ紙の長い巻紙にインクで描かれたもの——は、人間の体をモチーフにしているし、一方で彼女の描く頭髪は、彼女自身が認めるように、「風景のヴァリエant(変形)」として見られるからだ。彼女はアジア、とくに日本との特別なつながりを広げようとしている。 <http://drouet.marie.free.fr/> (フランス語、英語)

portfolio / Aicha Hamu



Aicha Hamu «SANS TITRE (BLACKMAIL)»
2009 - Usure sur satin Dimensions variables
(environ 250 m2) Vue de l' exposition En Découdre,
Fondation Espace Ecureuil, Toulouse, France,
commissariat Alexandra Fau © A.HAMU Courtesy
Galerie Catherine Issert, France

**Lucie Albon «Sans colle. Faire une Reunion
de ready mades».** Note projects. 2001-2008
centre Pompidou, Musée national moderne, paris

Aicha Hamu «SANS TITRE (BLACKMAIL)»
2009 - Usure sur satin Dimensions variables
(environ 250 m2) Vue de l' exposition En Découdre,
Fondation Espace Ecureuil, Toulouse, France,
commissariat Alexandra Fau © A.HAMU Courtesy
Galerie Catherine Issert, France

**Lucie Albon «Sans colle. Faire une Reunion
de ready mades».** Note projects. 2001-2008
centre Pompidou, Musée national moderne, paris

Aicha Hamu «SANS TITRE (BLACKMAIL)»
2009 - Usure sur satin Dimensions variables
(environ 250 m2) Vue de l' exposition En Découdre,
Fondation Espace Ecureuil, Toulouse, France,
commissariat Alexandra Fau © A.HAMU Courtesy
Galerie Catherine Issert, France



Romain Erkiletlian

ロマン・エルキレティアン

#303

"Tokyo me paraît plus intéressante que
Paris ou New York"

「僕にとって東京はパリやニューヨークより
ずっと面白い」

学

院の南棟の狭い二重螺旋階段のステップを登ると、303教室に乗船する。それは、若きアーティスト、〈空間の職人〉、ロマン・エレキレティアンによってスペースシャトルのようなものに変身した教室だ。中に入るとすぐ左手に、金色と蛍光ピンクの絵画で全体を覆われ、天上の幾何学模様と反復した金属的な構造に驚かされる。

「僕がこの部屋を選んだのは、金属的構造があったからだ。見方によって、それは浮き上がる天井との立体構造を生み出す」

夜になると、効果はよりいっそう心をとらえるものとなる。金属製の梁の向こうにガラス窓を通して見える都市風景が真っ暗になるのだ。教室の奥まで金属構造を引き延ばす壁はそれゆえ黒く塗られ（「外の光を想起させるために、白い正方形をいくつか書き込んで」）、その結果、拡張したガラス窓の前にいるような印象を受ける。

教師とはいえば、シャトル操縦室奥の壁を見晴らすことになる。そこに広がる幾何学模様と鮮やかな色彩のパッチワークは、モーヴ色（薄紫色）の背景に浮かび上がるパソコンの電気回線を思わせる。

「私は壁にデッサンを描くというより、空間の全面を使いよう努めた」と彼は説明する。彼にとって「教室の中のアート」は、2009年のフランス大使館における「No Man's Land」展以降、二つ目の〈三次元〉プロジェクトだ。

「日仏学院で僕は空虚と充満、呼吸と飽和の空間を造り上げた。大使館では、もともとあった格子（注：旧軍備部）のまわりに編成した構図を用いたもっと空間を充満させたものだった」

技術的には、ロマンはまず教室の写真を撮り、その写真を使ってラフを描いた。それをモーヴ色に塗った壁にオーバーヘッドプロジェクターを使って写していった。それ以外の部分は

すべてプロジェクターなしで描かれた。

「僕は何よりも画家だし、とりわけ空間の職人なんだ」

それは一目ではわからないが、彼の作品に親しみはじめると明らかになってくる。ロマンが表現しているのは、主として都市空間だ。実際、日仏学院のフレスコ画もその例にもれず、東京表参道界隈の眺望を再現している。その絵は碎け散り、再構成され、最終的には統一のとれたパッチワークを形成し、日中は教室のガラス窓から見える風景と対をなしている。

パリとニューヨークで暮らした後、2009年9月から生活の場として選んだ東京は、ロマンにとって尽きぬインスピレーションの源となっている。

「この都市で僕が愛しているのは、モザイク、建築のパッチワーク、タワー、小さな家屋、巨大な大通りと小さな路地との並列だ。いつでも、どこにいようと、何もなところと充満しているところとのコントラストがある。その上、都会のスタイルと要素も組み込まれている。ニューヨークは僕にははるかに面白みのない都市だ。パリと同じように美しい都市だが、あまりに均質なんだ。パリで僕の興味を引くのは、環状道路と地下鉄くらいだ」

自分のアトリエのある台東区の高層ビルから、隅田川と運河が縦横に伸びる眺望を眺めていないとき、ロマンは8メガピクセルの携帯電話（「それはA3サイズまでの写真にはとてもよく機能する」）で武装し、町の画像を狩りに出かける。

「僕はいつも大量の写真を撮る」自分の作品——中には100枚の写真をコラージュしたものもある——を制作するため、彼はまず小さなフォーマットで選択し、次に写真を拡大し、組み合わせ、一緒に貼り合わせ、それから「構成の仕上げを見直すため」絵画で修正する。彼はあらかじめ、小型判に焼いたもので構成を練る。この構成はたいてい三つの異なる向きで見て検討される。

「重力がないから、構成はより流動的になる。同じ一つの画像が、それを見る向きによって完全に異なるものとなるのは興味深い。そこから方向の混乱が生じる。それは、同じ一つの物語が、語り手の個性と物事の認識の仕方に応じて違ってくるのと似ている」

六本木の森美術館の展覧会（「六本木アートナイト」、2010年）で、彼は向きの違い同じ画像を三枚展示していたと打ち明け、「誰もそのことに気付かなかった。少なくとも僕に知らせてこなかった」と笑う。

油絵に関しては、ロマンは写真のアサンブラージュ（寄せ集め）から下書きスケッチを作り、そのあとそれを大きく画布に再現しつつ、スケッチを超えようと試みる。

「油絵は、細かいところと空間的な影響が消失するから、より抽象的になる。一方、写真のアサンブラージュでは、ドキュメンタリーとしての側面がある。写真は、東京で瞬間に消えてゆく場所の痕跡を残す。僕の興味を引くのは、結局のところ、我々が暮らす都市と世界の複雑さを報告することなのだ。混沌とした世界ではなく、複合的な世界。あるときは動的で、あるときは静的な」技術、方向、空間の混同……。

「人が僕の作品を見るとき、自分がどの時代にいるのか、自分が何を見ているのかわからなくなる。それでも何かを見ているのであり、僕はそれを視覚的に機能させようとする」

東京のフランス大使館と日仏学院で三次元を実験して以来、ロマンは空間絵画に興味を持ち、スイス、フランス、そしてもちろん日本でのプロジェクトに携わっている。自由が丘のフラワーショップ「シャールフラマン」の改装も手掛けた。「控え目でありながら、視覚的なインパクトが必要だった」

2010年10月の再オープン以来、店はいつも客であふれている。



成瀬康子 Yasuko Naruse 壁面の作品は天井へとつながり、それは建造物やエアコンの一部にまで及ぶ。建物を建てているような、あるいは作品そのものが新しい部屋、建物、もしくは街そのものや空港のような印象を受け、光り輝く力強い金色は、私たちを驚かせ、引きつける。この部屋の中にいると、空中に向かって飛び立ち、宇宙を旅できるような気になる！



松村隆太郎 Ryutaro Matsumura これって何？ 整然とした雑物の集合。集積回路、iPod、エアコン、配管……。いや、むしろ住宅設計のアイソメトリック図か？
ところが、教室の真ん中に座ると雰囲気は一変し、まるで宇宙船に乗っている気分。最上階でもともと宙に浮いているようなこの教室のイメージにぴったりの作品！

祖開亜希子 Sokai Akiko 螺旋階段を上りきり、学院の角部屋に到達すると、そこには近未来空間が広がっていました。ピポパッとコンピューターの機械音が聞こえてくるようで、語学学校というよりは宇宙船に乗って旅をしているような錯覚に襲われます。



portfolio / Romain Erkiletlian



ロマン・エルキレティアン
Romain Erkiletlian
(1972年、フランス、パリ生まれ)
壁画、絵画、修正写真、デッサンを
通して、ロマン・エルキレティアンは
「空間を再編成し、都会の
カオスから新たな
現実を湧出させている」。
ヨーロッパとアメリカで何年も
過ごして有名になった彼は、
現在東京で暮らし、
森美術館やフランス大使館のた
めにさまざまな作品を
制作している。
<http://www.erkiletlian.com>
(英語)



¹ Aicha Hamu «SANS TITRE (BLACKMAIL)»
2009 - Usure sur satin Dimensions variables
(environ 250 m2) Vue de l' exposition
En Découdre, Fondation Espace Ecureuil,
Toulouse, France, commissariat Alexandra Fau
© A.HAMU Courtesy
Galerie Catherine Issert, France

¹ Lucie Albon «Sans colle. Faire une
Reunion de ready mades».
Note projets. 2001-2008
centre Pompidou, Musée national moderne, paris

¹ Aicha Hamu «SANS TITRE
(BLACKMAIL)»
2009 - Usure sur satin Dimensions variables
(environ 250 m2) Vue de l' exposition
En Découdre, Fondation Espace Ecureuil,
Toulouse, France, commissariat Alexandra Fau
© A.HAMU Courtesy
Galerie Catherine Issert, France

¹ Lucie Albon «Sans colle. Faire une
Reunion de ready mades».
Note projets. 2001-2008
centre Pompidou, Musée moderne, paris

¹ Aicha Hamu «SANS TITRE (BLACKMAIL)»
2009 - Usure sur satin Dimensions variables
(environ 250 m2) Vue de l' exposition
En Découdre, Fondation Espace Ecureuil,
Toulouse, France, commissariat Alexandra Fau
© A.HAMU Courtesy
Galerie Catherine Issert, France



¹ Aicha Hamu «SANS TITRE (BLACKMAIL)»
2009 - Usure sur satin Dimensions variables
(environ 250 m2) Vue de l' exposition En Découdre,
Fondation Espace Ecureuil, Toulouse, France,
commissariat Alexandra Fau © A.HAMU Courtesy
Galerie Catherine Issert, France

¹ Lucie Albon «Sans colle. Faire une Reunion
de ready mades».
Note projets. 2001-2008
centre Pompidou, Musée national moderne, paris

¹ Aicha Hamu «SANS TITRE (BLACKMAIL)»
2009 - Usure sur satin Dimensions variables
(environ 250 m2) Vue de l' exposition En Découdre,
Fondation Espace Ecureuil, Toulouse, France,
commissariat Alexandra Fau © A.HAMU Courtesy
Galerie Catherine Issert, France



ThomaVuille

トマ・ヴェイユ

「東京では、すべての壁が絵画
色彩、喜びを受け入れる」

“A Tokyo, le mur à peindre tous
les accepter, la couleur, la joie”

Brasserie

